

松 山 大 学 論 集
第 29 卷 第 4 号 抜 刷
2 0 1 7 年 10 月 発 行

伊藤秀夫と松山商科大学の誕生（その1）

川 東 靖 弘

伊藤秀夫と松山商科大学の誕生（その1）

川 東 埴 弘

目 次

はじめに

第1章 生誕～松山高商教授就任まで

第2章 松山高商～経専教授時代

第1節 戦前・戦時期

(1926年9月～1945年8月)

第2節 戦後期

(1945年8月～1947年2月) 以上、本号

第3章 松山経済専門学校長時代－大学昇格に向けて－

第4章 松山商科大学長時代

まとめ

は じ め に

伊藤秀夫（1883年＝明治16年～1962年＝昭和37年）は田中忠夫（第3代松山高等商業学校長・1944年4月からは校名変更により松山経済専門学校長）が占領軍による公職・教職追放を受けた後、1947（昭和22）年2月、第4代の校長・松山経済専門学校長に就任した。そして、伊藤秀夫は敗戦後の学校の回復・復興に取り組み、1949（昭和24）年4月に松山経済専門学校（以下、松山経専と略）を松山商科大学（以下、松山商大と略）に昇格させ、初代学長に就任し、校長・学長職を10年余にわたり務め、創設期松山商大の基礎固めに多大な貢献をした。初代松山高商校長の加藤彰廉や「中興の祖」と言われる第3代校長の田中忠夫に比し、決して劣らない程の多大な功績を挙げた。

しかし、この伊藤秀夫については、加藤彰廉や田中忠夫のような本学教員の

手になる伝記（星野通編『加藤彰廉先生』昭和12年、松山商科大学編『田中忠夫先生』昭和61年）は刊行されていない。したがって、伊藤秀夫についての本格的な研究はまだなされていないといえる。

伊藤秀夫の経歴をこれまでの既存文献から見てみよう。

①『松山商科大学五十年史』（1974年＝昭和49年）

「伊藤校長は松山中学校から早稲田大学文学部哲学科へ進み、明治39年に同科を卒業、岩手県立一関中学校教諭となり、同41年北予中学校英語科主任講師、大正2年県立松山中学校教諭を経て同14年本校講師として赴任、翌15年教授となった…昭和24年4月松山商科大学が発足し、松山経済専門学校長伊藤秀夫が初代学長に任ぜられた。…」¹⁾

この経歴はきわめて簡単で、生年月日、家系・家族、松山中学の入学・卒業年や早稲田大学時代等のことが不明である。また、大正14年本校講師とあるが、非常勤であり、不正確である。

②『愛媛県史 人物』（1989年＝平成元年）

「明治16年～昭和37年（1883～1962）。松山商科大学初代学長。本県能楽界の大家。明治16年9月19日、松山藩校教官で久松家の侍講伊藤奚疑の次男に生まれた。祖父は藩儒伊藤閑牛である。松山中学校で安倍能成と親交を持ち、生涯の友であった。明治39年早稲田大学文学部哲学科を卒業、同年岩手県立一関中学校教諭となり、41年帰郷して北予中学校英語科主任教諭、大正2年松山中学校教諭を経て14年松山高等商業学校講師、翌15年教授となった。昭和4年には英語研究のためイギリスに留学、戦時中には生徒課長として学生と苦楽を共にした。昭和22年4月前校長田

1) 『松山商科大学五十年史』233、248頁。

中忠夫が教員適格審査により辞任した後を受けて、松山経済専門学校長に就任、24年松山商科大学昇格とともに初代学長になり、『本学は商業経済を中心とする諸科学の総合的専門的研究及教授を行うことを目的とし、学識深く教養高き人材を養成して広く経済文化の発展に寄与することを使命』とすることを宣言した。松山高等商業学校以来の伝統の上に、地域大学としての松山商科大学の基礎づくりをして、昭和32年3月病気のため学長を退いた。能楽の世界でも古典芸能謡曲を研究錬磨して宝生流洋々会を主催して当代一流の謡い手であり、安倍能成は『流儀の正しい傳承者は君のほかにはいない』と称賛した。長年の私学教育振興への貢献と能楽の造詣をもって昭和29年県教育文化賞を受けた。昭和37年12月30日79歳で没した。長男恒夫は松山商科大学教授で、昭和52～54年第6代目学長を務めた²⁾

ここでは、家系のことや松山中学時代に安倍能成と友人であったこと、早稲田大学卒業後の職歴、能楽の大家であることなどが大分詳しく紹介されているが、なお、松山中学の入学、卒業年や早稲田大学時代等のことが不明のままであり、大正14年松山高商講師というのも不正確さを踏襲している。また、田中忠夫が松山経専校長を辞任し、伊藤秀夫が経専校長に就任したのは昭和22年の4月でなく、2月であり、不正確である。

③その後、本校の卒業生で同志社大学名誉教授の内田勝敏氏が2011年の『温山会報』第53号に「回想・松山高商の恩師（四）－伊藤秀夫先生－」を載せ、1941（昭和16）年入学当時の松山高商の学園風景、伊藤秀夫先生のおもかげ、伊藤先生のイギリス観、松山商科大学の発足と伊藤学長、教養教育のゆくえ、謙和の教え、伊藤恒夫先生と浜誠さんと浜矩子さんのことなどについて、8頁にわたり、伊藤秀夫先生像を明らかにした。内田氏は1923（大正12）年の生

2) 『愛媛県史 人物』48頁。

まれ、1941（昭和16）年4月松山高商に入学、1943（昭和18）年9月に卒業し、その後、九州帝大を出て、大阪府立大、大阪市立大を経て同志社大学教授になられた方で、高商時代に伊藤秀夫先生から直接英語を学び、その学問や人柄・思想をよく知っており、先の2つの文献にはない優れた論考となっている。そこで、内田氏は伊藤秀夫先生の人物像として「白髪頭の上品な老紳士」、「威厳にみちた風格」、「温厚な人柄」、常に「相手方の立場に立って」考える生き方、「教養教育重視」の教育観、「謙和の教え」＝「謙虚で、おだやかにものごとに対処する」人生観等について活写しているのが大変印象的であった³⁾

ただ、この内田論考でも、伊藤秀夫先生の松山高商赴任以前の経歴については触れられておらず、また、伊藤秀夫先生が大正12年松山高商の創立と同時に赴任された、とあるのは事実誤認である。

④それに対し、伊藤秀夫の長男である伊藤恒夫氏が「秀夫と達夫と恒夫」という一文を松中・東高同窓会報『明教』第2号（昭和46年12月）に書いている。そこでは、伊藤秀夫の松山高商以前の経歴や家族、能楽、晩年のこと等について触れていて、さきの3つの文献・論考には記されていない貴重な資料であるので、必要な部分を紹介しよう。

「伊藤秀夫と伊藤達夫と恒夫（私）の関係についてよく聞かれます。秀夫（明治三十五年松中卒）は、もう五十才をこえられた松中同窓の皆さんならよく御承知の『ボラ』です。私は、その長男です。達夫（明治四十年松中卒）は秀夫の弟、私の叔父です。

ついでながら、汪（ひろし）は私とひとつ違いの弟（戦死しました）、誠（浜の姓でしたが）も英太郎も、私の実弟です。いずれも松中卒です。英太郎は昭和二十五年新制二回卒ですが。

さて、父の秀夫は、安倍能成さんの一年下です。秀夫の履歴書には明治

3) 内田勝敏「回想・松山高商の恩師（四）－伊藤秀夫先生－」『温山会報』第53号、2011年。

三十九年七月早稲田大学文学部哲学科卒業とあります。旧制高校三年、旧帝大三年といういわゆるエリートコースとはちがいで、当時、私立大学は速成教育だったのです。だから、私立大学卒業生は学士号ももらえなかったのです。父には母のちがう兄がいましたが、子供の頃に父（私の祖父）を亡くした父（秀夫）は、弟達夫や妹の面倒をみなければならなかったのです。少しでも早く卒業のできる早稲田を選んだのだと聞いたのを覚えております。

『父と教師』－早稲田を卒業の年、十一月、岩手県の一の関中学校に赴任したのです。何故はるばる東北の一の関までいったのか正確なこと、ついで、聞き忘れているように思うのですが、父の松中時代の英語の森次太郎先生（余土村出身、当時東京に在住）のお世話ではないかと察せられます。というのは、明治三十九年消印の父から森先生宛の長い長い（延ばしてみると二メートル程）毛筆の手紙に一の関中学にはじめて出勤、校長さんから同僚に紹介された時の模様、校長、教頭などの人物紹介を漱石の『坊ちゃん』に出てくる人物にたとえておもしろく書いた手紙があるからです。この手紙は一の関から最初に出した手紙で、それは森次太郎先生に宛てられています。

それが振りだして、その時から英語教師だったようです。そこに二年いて、明治四十一年、帰郷、十二月十八日付で松山の北予中学の教師になり、大正二年五月二十七日付で松山中学に転任、大正十五年九月六日付で松山高商の教授になっています。松山高商へ移ってから、昭和九年三月まで松中の非常勤講師をしていたようです（松中同窓会名簿旧教職員の部による）。だから、松中では、計二十二年間英語の教師をしていたことになります。松山高商に勤めだしてから、戦時中、生徒課長をやったり、戦後、大学になってから学長に祭り上げられたりして、昭和三十二年三月退職まで三十年間、一の関中学を振り出しに五十年間教師をやっていたことになります。よくも五十年間、ともかくも無事に勤めさせていただいたものと

思います。

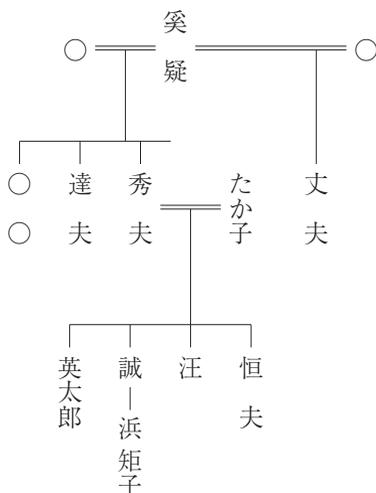
『父と謡曲』-教師生活五十年間も、たしかに長い年月ですが、父の謡曲生活は七十年に及びます。たしかに、九才の頃、病身の父の父が、父に謡いを習わせ、それを聞くのを楽しんだのが、はじまりなのです。東京での学生時代には高浜虚子や河東碧梧桐たちにも習ったときいています。松山に帰ってからは藤野漸先生や小川尚義先生にも習いました。私が、まだ幼なかった頃から私の家でお弟子さんたちにお稽古をしていました。父は謡曲にその情熱をもやしていたと思います。たしかにそれが生きがい、使命感みたいなものを感じていたようです。

昭和三十一年、脳軟化症でちょっと倒れたりして以来、日常の会話もかなり不自由になりましたが、謡曲本をみながら謡う時には、全く正常、流ちょうに謡いました。ふしぎだと思っただけでした。昭和三十七年いよいよ亡くなるまでの間、二度ばかり脳軟化症悪化のため謡いを禁ぜられたことがありました。その間、好きで好きでたまらぬ謡がうたえぬことは、さぞつらかったろうと思いますが、父は、だまって耐えていたようです。父はそのつらさを母にももらしたことはなかったようです。父はがまん強かったと思います。亡くなる前一年間ほども謡いを禁ぜられていました。その間に、父の流儀の謡の会（洋々会）の第五百回記念演能会がありました。父の亡くなる年の秋、十月二十四日、道後公会堂で、この会までには、父も舞台上で謡えるようになることを、流儀の方々も待ち望んで下さったのですが、ついにその願いはかないませんでした。それでも父は、前々から、この会の計画相談の会にはいつも参加し、その日のために生きているようでした。当日幹事の方と舞台に出ましたが、ごあいさつは代りの方にしてもらい、終日、椅子の上に腰をかけ、謡曲や能をきき、かつ、見つめていました。この会の実現は父にとって大きな大きな課題であり、ほんとうにほんとうに嬉しく楽しい会であったのです。それを無事終えて、二ヶ月余りしてから、父は眠り続けはじめました。そして十二月三十日午前十一

時、とうとう静かに逝ってしまいました。あの会を終えて、父は自分の生涯の仕事はこれで終わったと考えたのではないかと思います。生きがいがついたのでしょう」⁴⁾

ここから、伊藤秀夫の兄弟のことや早稲田大学入学の理由、岩手の一関中学赴任の事情、謡曲、晩年の状況、逝去のことなどが具体的にわかる。

伊藤家の家系図を示せば次の如くである。



⑤さらにもう一つ、伊藤秀夫の大の親友である安倍能成が「秀さんを悼む」という一文を秀夫の死後の1963（昭和38）年2月に記しているので紹介しておこう。そこで、秀夫の父のことや謡のこと、早稲田大学時代のエピソードなどが載っていて、これまた伊藤秀夫の人間像がわかり、大変興味深い。

4) 松中・東高同窓会報『明教』第2号，昭和46年12月。

「伊藤秀夫君は生まれ故郷の松山に残された唯一人の幼友達であった。この秀さんは私と同じ年の明治十六年九月に生まれたのだから、十二月生まれの私に比べれば、三ヶ月の兄であった。私は近頃二年に一度くらいの割で松山に帰る廻り合はせになって居るが、血縁の繋りで松山に残って居る者もあるけれども、元来血縁だといふ理由で特に親しみも義理も感じない人間だから知らせも尋ねもしない。必ず尋ねて泊めてもらふのは秀さんの所で、その外の地方のえらい人も名士も、特別の用件でもの外は皆御無沙汰して居る。元来伊藤家と私の家は、恐らく父が医者だったので、病家といふ関係から始まったのかと思ふが、何でも恒吉家から来られた秀さんの母君は、父がお世話したと聞いて居る。秀さんの父君を父は禎さんと呼んで居たが、奚疑といふ名で、今も常信寺には父の書いた「樂天伊藤奚疑之墓」といふ墓表があるはずである。これは恐らくかの「天命を楽しんで又奚ぞ疑はん」といふ陶淵明の「帰去来の辞」の文句から来たものであらう。父君は松山の教育界、実業界に功労のあった人で、伊予教育義会の幹部で、松山中学創立の恩人であり、又五十二銀の取締でもあった。私は子供の頃から顔を知っていたが、痩せた厳格な風貌をした人であって、肺を病んで一つの肺を失ひ、残る一つの肺で生きて居られたので「伊藤の禎さんはまだ死なん」と唄にもうたはれたといふことである。秀さんは小さい時から、高浜虚子の長兄池内政忠氏に下掛宝生流の謡を習はされたが、子供の時はそれがいやで仕方がなかったと告白して居たけれども、藤野漸氏の帰松と共に、家元直伝の正しい謡を習ふことになり、藤野門の洋々会を、藤野のおいさん、同じく新朔、金五郎から皆伝を受けた先輩の小川尚義さんの指導を受けて、継承統率することになり、下掛宝生流の謡に対する傾倒は、宗教的といつてよいくらい絶対的に近く、謡のことゝいふと一切の面倒と犠牲とを惜しまぬといふ風であった。ところが去年の三月十一日に、この洋々会の五百回記念謡会を催すと意気こんで居たのに、それに先だつて中風にかゝり、言語が不自由になり、謡も謡へなくなったのは、

秀さん自身にとっては固より、近親友人弟子にとって実に残念極まることであつた。然るに松山出身のワキ方宝生孫一（旧姓光本）君が、友人上掛宝生の野口禄久、野村蘭作、太鼓の金春宗家その他を語らつて、五百回記念の能楽をこの秋の十月二十四日に、松山道後の公会堂で盛大に催してしてくれ、秀さんは物こそいへね、舞台に出て徳一君と感激の握手を交はしたといふことを聴き、私は弥一君に本当に有難いことをしてくれたと感謝すると共に、この五百回記念能を秀さんの生前に催し得たことを、せめてもの喜びとしたい。（中略）

こんな面白い話も聞いた。早稲田にはいったが、貧乏で服が作れない。何とか服を工面してくれと父に便りをしたら巡查の着古した夏服を手に入れて送ってきた。これを年中通じて着ていたら『白妙のきみ』と、いとも優美なニックネームを貰った。とうとう寿命がきて、ズボンが切れてしまった。また父に懇願におよんだら、村にはもう服はないからと、ももひきを送ってきた。『これをはいて学校に出たら、みんな喜びましてネ』ほくらも笑う。先生は大得意。ポッポと顔から湯気を立てながら、『それでネ、いつの間にか白妙の君が順徳院にかわっちゃったんですよ』『順徳院ですか?』と、ほくらが首をひねるのを、待ってましたとばかり、『百人一首ネ、ほら順徳院のうた、ももひきや、古くやぶれて、すねが出て…』、落語のおちのような話に、みんなが笑いころげたことだった⁵⁾

この一文から安倍能成と伊藤秀夫がいかに親友であつたかがわかる。ただ、安倍の記憶も不正確で、秀夫が早稲田に入学したときはすでに父は亡くなっており、この箇所は事実誤認であろう。

以上の5つの文献、史料を踏まえ、現時点で私が入手でき得た史料を加え、伊藤秀夫の経歴、家系・家族、その人柄・思想、松山高商～経専教授時代なら

5) 愛媛出版協会『愛媛』第2巻第11号、昭和36年2月。

びに松山経専校長・松山商大学長時代の功績等について考察していこう。

第1章 生誕～松山高商教授就任まで

伊藤秀夫（以下、秀夫と略）は1883（明治16）年9月19日、松山藩の学者・伊藤奚疑の次男に生まれた。父は松山藩校の学者であり、明治維新後には実業家となり、第五十二銀行の取締役も務めていた。

奚疑の子供に長男丈夫、次男秀夫、3男達夫⁶⁾ および娘がいる。

次男の秀夫は安倍能成（1883年12月23日生まれ、東京帝大卒。第一高等学校校長、戦後文部大臣等歴任）と同じ年の生まれである。安倍は1896（明治29）年4月愛媛県尋常中学校（松山中学）に入学し、5年後の1901（明治34）年3月に卒業している⁷⁾。秀夫は安倍と同一年だが学年は1年下で、松山中学を1902（明治35）年3月に卒業したから、入学は1897（明治30）年4月と推定される。松山中学時代の恩師の一人に森次太郎（1897年4月～1900年3月まで松山中学で英語の教諭⁸⁾）がいて、英語の授業を受けた。なお父奚疑は秀夫が中学に入学する前年の1896（明治29）年3月に死去している（墓碑銘より）。

秀夫はこの松山中学時代の最後の年、1901年の1年間であるが、当時松山中学教諭に赴任してきた渡部善次郎（1901年6月～1903年10月まで勤務。英語教諭。後、松山高商第2代校長）からも英語の授業を受けた。それは、渡部善次郎が松山高商の第2代校長に就任したときの経歴の中に、松山中学時代の経歴があり、その生徒のなかに伊藤秀夫と佐伯光雄（後、松山高商教授）が居たことが記されているからである。それは次の如くである。

6) 伊藤達夫（たてお）は1887（明治20）年11月29日生まれ。松山中学を出て、東京帝大文科卒。第五高等学校教授をへて、1921年松山高等学校独文教授、翌年ドイツ留学。松高教頭。松高自由主義の校風を守った。1943年安倍能成の推挙で大阪高等学校長に就任。戦後の1948年松山中学校長、その後新制松山南高校の初代校長となり54年まで在職。男女共学下の民主的校風を打ち立て、職員・生徒の敬愛を受けた（『愛媛県史人物』）。

7) 『安倍能成－教育に情熱を注いだ硬骨のリベラリスト』（平成24年度愛媛人物博物館企画展）

8) 『愛媛県立松山中学校、松山第一高等学校、愛媛県立松山東高等学校、同窓会会員名簿』第9号、昭和37年度より。

「(渡部善次郎は) 明治三十年文部省の検定試験に首尾よく合格, 教育界への第一歩を近江第二中学校に振出し, 越へて同三十四年六月松山中学校教諭として迎へられた。翌三十五年の松山中学第十期の卒業生のうちには今の伊藤秀夫, 佐伯光雄の両教授が居る」⁹⁾

秀夫は1902(明治35)年3月松山中学を卒業した後, 既に父が亡くなっていたので, 弟の達夫や妹の面倒をみるために少しでも早く卒業できる早稲田大学を選んだという。また, それだけでなく「自由の学風」を慕って, 早稲田大学文学部哲学科に入学した。早稲田入学年月は不明だが, おそらく1903(明治36)年9月であろう。そして, 安倍能成が述べていたように, 秀夫は学生時代に貧乏生活を送っていた。

この早稲田大学時代について, 秀夫の逝去(1962年12月)後, 星野通(当時, 松山商科大学学長)が「伊藤先生を憶う」の中で, 1964(昭和39)年に次のように回想している。

「先生は若い頃, 自由の学風をしたって, 早稲田大学にまなばれた。亡くなった杉森孝次郎氏など同級生だったらしいが, 同大学では, のち同大学教授となった関余三郎氏と首席をあらそわれたという。後年英語学者となられたが, 早大の専攻は哲学だったのだ。その片鱗は先生の日常のお言葉や, 読んでおられる本でときおりうかがえた」¹⁰⁾

このように, 秀夫は早稲田大学の哲学科時代には貧乏生活ながら首席を争うほど極めて優秀であったことがわかる。また, 同期に後に早稲田大学の教授となる杉森孝次郎, 関余三郎などがいた。

秀夫は3年後の1906(明治39)年7月に早稲田大学文学部哲学科を卒業し,

9) 『松山高商新聞』第89号, 昭和8年11月25日。

10) 星野通「伊藤先生を憶う」『温山会報』第7号, 昭和39年, 21頁。

同年11月に松山中学時代の恩師の森次太郎先生の紹介で、岩手県立一関中学校に教諭として就職したが、2年後の1908(明治41)年に松山に帰郷して、同年12月18日付けで北予中学校(白川福儀校長)に赴任し、英語科主任教諭になった。この時、25歳であった。結婚の時期についてはまだ確認されていないが、この北中時代にたか子(1890年=明治23年生まれ、日本女子大附属高女卒)と結婚し¹¹⁾1912(明治45)年1月3日に長男・恒夫が生まれ、翌年に次男・汪(ひろし)が誕生した。

秀夫は北予中学に5年余勤め、1913(大正2)年5月27日付けで母校の松山中学校に転任した。この時29歳であった。この翌年に星野通(1900年10月生まれ。後、第2代松山商科大学長)が松山中学に入学し、秀夫の英語の授業を受けている。星野は秀夫の教え子であった。また、古川洋三(1898年7月生まれ。後、松山高商教授)もこのとき松山中学生であり(1911年~1916年)、秀夫から英語の授業を受けていたものと推測される。

秀夫が松山中学の教員をしていた1923(大正12)年4月に松山高商が開校され、その年に3男・誠が誕生している(後、浜誠となる。浜矩子はその長女)。秀夫は松山中学に勤務しながら、1925(大正14)年から松山高等商業学校で英語の講師を務めた(嘱託)。この年から松山高商では定員を1学年50名から80余名に増やしたため(3学年で150名から250名に増やした)、英語の教員が求められたためと推測される。

秀夫は、1926(大正15)年9月、加藤彰廉松山高商校長により英語教員として、松山高商の教授に採用された。秀夫が英語教員として採用されたのは、英語担当の河内富次郎教授(フランク大学卒、1924年4月採用)が1926年3月に「一身上の都合」で退職したため、その後任であったと思われる。また、秀夫の中学時代の英語の恩師で大学が同窓の渡部善次郎教授(松山中学、早稲田大学卒、米国エール大学卒)が教頭にいたため、その縁もあったと思われる。

11)『大衆人事録 第十九版』帝国秘密探偵社、昭和32年。

第2章 松山高商～経専教授時代

第1節 戦前・戦時期（1926年9月～1945年8月）

1) 教育者・研究者としての伊藤秀夫

伊藤秀夫は1926（大正15）年9月、松山高商教授に赴任した。このとき秀夫は43歳であった。

1926年、松山高商は創立4年目に入っていた。校長は加藤彰廉で、専任教員としては、渡部善次郎（早稲田大学・エール大学卒、1923年4月赴任、英語）、佐伯光雄（山口高商卒、1923年4月赴任、簿記、会計学等）、西依六八（京都帝大卒、1923年4月赴任、商品学、数学等）、古川洋三（関西学院卒、1923年4月赴任、保険、商工経営、簿記等）、田中忠夫（東京帝大卒、1923年4月赴任、経済学、歴史等）、一柳学俊（京都帝大卒、1924年4月赴任、法学通論等）、村川澄（早稲田卒、1925年4月赴任、商法、民法）、星野通（東京帝大卒、1925年4月赴任、民法、ドイツ語等）、大鳥居蕃（東京商大卒、1925年6月赴任、保険、商業学）、高橋始（早稲田卒、1926年4月赴任、フランス語等）、渡辺良吉（大阪高商卒、1926年6月赴任、商業英語等）がいた¹²⁾ 年輪的には、加藤校長の64歳、渡部善次郎の48歳、西依六八の44歳に次ぐ年齢で、佐伯光雄とほぼ同年齢であった。

秀夫赴任の翌年、1927（昭和2）年度の入学試験が3月30、31日に行なわれた。秀夫は初めて入試にかかわり、英語の問題を採点した。その後、『松山高商新聞』の編輯子から感想を聞かれ、「大した感想はありませんが、只昨年の試験の時に比べると大変よかったですと思ひました。…受験生の質が年一年と向上して来ると思われる事を喜びます」などと述べている¹³⁾

1927年度の入学式が4月15日に挙行され、92名が入学した。本年度の秀夫

12) 松山高商創立時代の学校については、拙著『松山高商・経専の歴史と三人の校長－加藤彰廉、渡部善次郎、田中忠夫－』愛媛新聞サービスセンター、2017年、参照。

13) 『松山高商新聞』第18号、昭和2年4月30日。

の担当科目は不明だが、おそらく1, 2年生に英訳, 2年生に英作と思われる。松山高商では毎年各学年のクラス担当の主任教授が決められているが、残念ながらこの年は不明で、秀夫がクラス担当したかどうかはわからない。

1928(昭和3)年度の入試が3月30, 31日に行なわれ、秀夫も英語の出題・採点をしたと思われる。4月16日に入学式が挙行され、103名が入学した。本年度の秀夫の担当科目は、1, 2年生に英訳, 2年生に英作となっていた¹⁴⁾。また、クラス担当は次の如くで、秀夫は1年の担当となっている¹⁵⁾。

3年	A	渡辺良吉	B	大鳥居蕃
2年	A	村川 澄	B	田中忠夫
1年	A・B	伊藤秀夫	C	西依六八

1928年4月30日に謡曲研究会第1回例会を磯野先生宅に開催し、秀夫も出席し、小袖曾我のシテ役を秀夫が演じている¹⁶⁾。秀夫は引き続き、謡曲に熱心であった。

1929(昭和4)年度の入試が3月30, 31日に行なわれ、秀夫も英語の出題・採点をしたと思われる。4月15日に入学式が挙行され、99名が入学した。本年度の秀夫の担当科目は1, 2年生への英訳であった。また、クラス担当も引き続き1年A・B組を担当した¹⁷⁾。

1929年度の海外留学教授として、加藤彰廉校長は秀夫を選んだ。古川洋三、一柳学俊、佐伯光雄教授につぐ4人目であった。これは異例の決定で、『松山高商新聞』編輯子は「本年度海外留学教授は一般より興味を以て見られていたが、予想は全く外れて去る五月三十日付を以て伊藤秀夫教授が留学研究を命じられた。氏は七月十八日神戸出帆の諏訪丸にて出発、主として英国留学の予定

14) 『松山高商新聞』第28号, 昭和3年3月21日。

15) 『松山高商新聞』第29号, 昭和3年4月23日。

16) 『松山高商新聞』第30号, 昭和3年5月23日。

17) 『松山高商新聞』第39号, 昭和4年3月26日, 『同』第40号, 昭和4年4月25日。

である」¹⁸⁾と述べている。赴任順からいえば田中忠夫（1898年生まれ、このとき31歳）であったが、おそらく年齢を考慮して加藤彰廉校長は秀夫（このとき45歳）を先にしたのではないかと推測される。

同年6月18日に、伊藤教授送別会が加藤校長、渡部善次郎教頭等教職員出席のもと亀之井旅館にて行なわれている¹⁹⁾。

そして、『松山高商新聞』の編輯子が同紙第44号（昭和4年7月25日）に「伊藤教授の海外出張によせて」と題する一文を掲載している。師弟愛のみられるほのほのとした文章である。

「大正十二年古川教授が、本校第一回の在外研究員として派遣されて以来茲に六ケ年、其の間、一柳、佐伯現教授の洋行あり、今回第四回目の研究員として伊藤教授が任命され、近日出発されることゝなつた事は同教授は勿論我等として誠に欣快に堪へない次第である。

教授は主として英国にあつて専門の英文学研究に努力される筈であるが、教授平常の熱心は滞英中更に其の度を増し必ず我々の期待に副ふて尚余りある御土産を獲らるゝことゝ思つている。

滞在期間は一年ばかりの短期間であるから広い範囲に亘つての研究を吾人は期待するのではない。が、精々多くを見且学ばれると共に教授得意の英文学及英語学には特に一層の磨きをかけられ、帰朝の暁は朝日に照る黄金の様に一段の光彩を放たれることを期待するものである。

我々は教授の前途を祝福すると共に充分健康に注意せられ初期の目的を達して故山に錦を飾られることを願つて止まない」²⁰⁾

なお、秀夫が留学中の英語の担当として、加藤校長は山内一郎（松山高商第

18) 『松山高商新聞』第43号、昭和4年6月25日。

19) 同。

20) 『松山高商新聞』第44号、昭和4年7月25日。

2期卒。九州帝大卒)を講師(嘱託)として採用した。

7月14日、秀夫は本校教授、生徒及び松山中学の職員生徒ら多数の見送りを受け英国留学の途につき、7月18日、神戸から諏訪丸に乗船し、インド洋まわりでイギリスに向かった²¹⁾

8月7日に秀夫はインド洋上から『松山高商新聞』に「印度洋上のどんぶりの味 頭髪も伸びた」と題し、第1報を寄せた。大要は次の如くである。

「小生お蔭様で至って頑健、今北緯五度余りの熱帯を西航、明日はコロンボ着の筈。気温は高くなく、松山のこの頃に比し凌ぎ易く感じられる。ただ、毎日の洋食責めには閉口だが、時々鰻井やら海老の天井、味噌汁が出ることもあり、このごろは腹の調子も良い。各寄港地では現地見物し、乗客の中に日本人の学校連中が三人いて話相手に好都合である。

印度洋上にて 八月七日正午認 伊藤秀夫²²⁾

その後、秀夫がいつロンドンに着いたのかは不明であるが、9月にはオックスフォード大学に留学し、イギリス文学を学び研究したものと思うが、具体的には不明である。

イギリスに留学していた秀夫は、1930(昭和5)年1月14日ロンドンを出発、15日ドイツのベルリンに行き、3月初めまで同地に滞在した。1月31日にベルリンから「日独対抗の爽快なるアイスホッケーの試合、思わず頑張れ！と叫び申し候」と題した第2報を寄せた。その大要は次の如くである。

「誠に申し訳なくご無沙汰しております。小生幸いに頑健。去る一月十四日夜ロンドンを出発、十五日夕方伯林着。松山出身の方々のお世話で下宿に落ち着き、早速その晩から各地見物に連れていただき、満州医大対ベ

21) 『松山高商新聞』第45号、昭和4年8月25日。

22) 『松山高商新聞』第46号、昭和4年9月25日。

ルリンチームのアイスホッケーの試合を観戦しました。結果は惜しくも敗北しましたが、その勇気あり活発な動作に思わず頑張れと叫びました。当地ベルリンはこの間珍しく暖かく、故国の冬のような寒さを感じず、陽気春の如くシャツだけでもすまされる暖かい日に恵まれています。旧知の同郷人や昨年同船にてベルリンに来られた人たちに案内されて郊外まで見学しています。それによると、ベルリンの都市の整頓せる心地よさ、市民の若々しい元気よさはロンドンよりも優れていると断言できます。市街が整っていて、家屋が皆立派なこと、店舗が広く明るく美しいこと、道行く男女が皆元気な様子など、大戦の戦敗国で借金だらけの国だという風には全然見えず、国民の顔色にも『かせいでかせいで皆借金に注ぎ込むむだ』というような悲観の色は少しもなく、『何時までかかっても必ず義務を果す、其のあとで見て居ろ！』といった様に見受けられます。もう一つ目につくことは途上に行く女性の数がロンドンに比し著しく少ないことです。ロンドンの街路では女子が驚く程多いのに、大戦で男子を失ったドイツで街路で女子が少ないのは、ドイツの女子が英国の現代の女子より家庭的であるためと考えられます。ドイツの男子のことで一つ申し上げたいことは三十余り以下の若い紳士の多数が左の頬に刀傷をもっていることが多いことです。これは先輩の説明によるとドイツ特有の決闘の痕跡だそうです。いまは禁じられていますが、地方の古風な大学では今も盛んに行なわれているとのこと。そして男ともあろうものがこの跡が一つや二つないようなニヤケでは駄目だなどという考えがドイツの女性のなかにも存し、なんだかロマンチックに聞こえます。英国の大学ではとても見られず、あくまで典雅、上品さを紳士の特質とし、スポーツに対する熱心さによって男らしさを示すのに比し、ドイツの荒っぽさに驚いています。何だか武士道的なとも申され、善用されればこれぐらいは青年に良いと思っています。また、英国の大学では共産主義にかぶれることはありませんが、その反対に蛮骨稜々活発なるドイツの大学では危険思想というのは共産主義ではな

くファシズムと聞くのは成るほどと思われます。

典雅上品を体裁に飾るニヤケ風と思われぬよう、また蛮骨天真爛漫あな快活を暴力主義と思われぬようにすることが肝要だと感じました。そんな間違いをしていると、自由を我が儘と取り違えたり規律と束縛の区別がわからなくなったりする結果、近年流行の学校騒動が起こるか。

我が親愛なる松山高商学園に何等縁のないことまで気にかけて中々寝られぬ夜もあります。つい長々となり恐縮です。

学年試験も近づいておりますね。どうか体を大事に御勉強祈ります。

三月初めにベルリンを出て、イタリー、スイス、フランス、ベルギーをへて三月末にイギリスに帰るつもりです²³⁾

秀夫は1930年5月末、英国のロマン派詩人・ワーズワース(1770~1850年)の住んだダヴ・コテージをもとめて、スコットランド地方を旅行した。後に『松山高商新聞』にその旅行記事を載せているので、全文紹介しよう。

「一九三〇年の五月の末、私は英国湖水地方からスコットランド方面の、さすらひの身軽な旅に出た。別に窮屈な予定もなく、足にまかせて地図と案内記をたよりの旅であったが、雨あがりの或日、グラスミア湖畔のモス・グロウヴ・ホテルといふのに疲れた足を休めた。湖畔とはいへ湖水を直接に見晴らすといふのではないが、道路からチョット奥まった森のかげにある二階建のさゝやかな宿である。這ひまとうた鳶の新芽が午後のやはらかい日に映える緑の色のすがすがしさは、少からず私の目と足を引きつけたので、此の国の夏の日の常として、まだ日暮れには大分早いにかゝはらず、ここに落付く気になった。一と休みして夕食にはまだ時間があるので、ほど遠からぬワーズワースの住んだダヴ・コテージのあたりまで歩いて

23) 『松山高商新聞』第51号、昭和5年2月25日。

みた。五月雨あがりの田舎道の静けさは先づ私を喜ばせた。

ちょうど日曜日であるので此の詩人の旧居を観ることは明日のことにして、足を返して村の寺にその墓を訪うた。例の通り数本の大きな水松樹の蔭にその一族の三四人と並んで、詩人にふさはしい質素な墓がある。自然の風致に恵まれた此の閑かな古寺の、音もなく流れる小川のほとりに、安らげく眠っている詩人の墓に詣でるといふ心持は何ともいへぬ喜びであった。

この国の夏の夜は殊更に明けやすく、否たそがれと暁とが引つゞいてるといってよいのだが、前日の疲れ（私は出来るだけ徒歩で様々のところへ行ってみる）と余りにも閑かな宿の心地よさとでよく眠り、目がさめたのは五時であった。女中が運んでくれた水で口すゝぎ顔を洗って髭を剃り、衣服を整へて階下の食堂に行く。広からぬ室に程よくならべられた食卓には何れも雪をあざむく真白いクロスをかけ、ちょうど三四人の一组の男女が席についたばかりでのところであった。私はチョット挨拶をして窓際の小さい食卓についた。十七八と見える簡単ななりをした女中が、キビキビした動作で歯切れのよい可愛い声で給仕してくれる。器は清く料理は簡素、私は心持のよい食事をすませ紅茶をすゝりながら窓外を見ると、ふさふさと茂った木の新しい葉から滴りそうな翠が見るからにすがすがしい。名も知らぬ小鳥の歌と、向ふの食卓の男女のつましやかな食後の閑談の声と、女中の軽快な靴音は決して此の閑寂を破る力はなかった。何といふ清らかな静けさであらう。私は紅茶のかおりを楽しみながら、この閑けさに溶け込むやうにさへ感じた。

後日になって日本の宿で、ドテラやユカタ姿で、アグラをかいて、女中と冗談をいひながら茶漬をかき込む朝飯や、隣室の男女があたりかまはず高声で談笑しながら食事する物音の殺風景を思うて、殊更にあの朝食の時の心持は正に私の生涯忘れないだろうところのものだと思はざるを得ぬ。これは後日になって思ったことで、その時はそんな比較など思ひつきもせ

ず、ひたすら嬉しさに浸り、その閑寂に酔うていただけであったが、そのうちに私は、ワーズワースの『質素な生活と高尚な思想』といふ言葉を思ひ出し、紅茶にしめった唇でこれを誦してみた。何だか我に帰ったやうになった私は、名残り惜しいやうな心持で室を出て、そのまま湖畔の静かな道をダヴ・コテヂへ幸福な足を運んだのであった²⁴⁾

秀夫は留学を終え、6月28日ロンドンを出発し、アメリカ経由で帰国の途につき、8月4日龍田丸にて横浜に着した²⁵⁾

8月16日に温山会（松山高商の同窓会）は伊藤秀夫教授帰朝歓迎会を道後大和屋にて催し、折り柄夏季休暇中にて、同窓も多数出席し、頗る盛大であった²⁶⁾

10月9日、秀夫は松山高等女学校にて開催の第2回愛媛県中等学校教員研究大会に列席し、「英国雑感」と題した講演を行なった²⁷⁾

11月には、松山高商の2年生が伊藤秀夫教授帰朝歓迎会を開いている²⁸⁾

1931（昭和6）年度の入試は3月27、28日に行なわれ、4月11日に入学式が挙行され、110名が入学した。本年度の秀夫の担当科目は1、2年生に英訳、2年生に英作であった。また、クラス担当は次の如くで、秀夫は2年A組を担当した²⁹⁾

3年	A	渡辺良吉	B	村川 澄
2年	A	伊藤秀夫	B	古川洋三
1年	A・B	大鳥居蕃	C	西依六八

24) 『松山高商新聞』第125号、昭和12年6月20日。

25) 『松山高商新聞』第56号、昭和5年7月25日。

26) 『松山高商新聞』第57号、昭和5年9月27日。

27) 『松山高商新聞』第59号、昭和5年11月25日。

28) 『松山高商新聞』第60号、昭和5年12月25日。

29) 『松山高商新聞』第64号、昭和6年4月25日。

1931年12月、秀夫・たか子夫妻に4男が誕生した³⁰⁾ 英太郎である。この名は英国留学から帰って生まれたことから名付けられたと言われている。

1932（昭和7）年度の入試が3月27、28日に行なわれ、4月11日に入学式が挙行され、116名が入学した。本年度の秀夫の担当科目は1、2年生に英訳、2年生に英作であった。また、クラス担当は次の如くで、秀夫は1年A・B組を担当した³¹⁾

3年	A	大鳥居蕃	B	村川 澄
2年	A	星野 通	B	西依六八
1年	A・B	伊藤秀夫	C	高橋 始

1933（昭和8）年度の入試が3月末に行なわれ、4月10日に入学式が挙行され、108名が入学した。

同年4月11日、秀夫の恩師の渡部善次郎（教頭で学生課長、英語担当）教授が病気のため退職した。善次郎は2年前から軽微な脳溢血を発症していたが、全快せず遂に退職となった。そのため、秀夫が善次郎の英語の授業を急遽担当することになった。そのためであろうか。本年度のクラス担当は次の如くで、秀夫は担当にはなっていない³²⁾

3年	A	渡辺良吉	B	大鳥居蕃
2年	A	高橋 始	B	星野 通
1年	A	田中忠夫	B	西依六八

また、本年高商に不幸が続いた。9月18日、加藤彰廉校長が去る6月より

30) 『松山高商新聞』第71号、昭和7年1月1日。

31) 『松山高商新聞』第74号、昭和7年4月12日。

32) 『松山高商新聞』第83号、昭和8年4月12日。

腎臓を病み、病臥中であったが、創立10周年を前にして遂に亡くなった。9月21日に大講堂にて校葬がなされた。そして、次の校長選びが始まった。

10月26日、理事井上要が一旦病気退職していた渡部善次郎を帯同して学校に突然来て、善次郎を2代目校長に任命した。教授会側からみると、唐突で奇異な印象を受けた。その時、佐伯光雄教授（教務課長）が異議を述べたが、井上要は渡部善次郎を推すと言ひ、講堂にて校長就任式を行なった。教授会側は不満であったが、一旦決まった以上は、この病弱な校長を扶けて加藤彰廉校長の遺業を完うしようという健気な態度でのぞんだ。

しかし、1934（昭和9）年度の入試が3月末に行なわれ、その入試作業が終わった3月31日、善次郎校長は教務課長の佐伯光雄教授を突然解雇し、また、校務体制を一新し、新たな教務課長に前生徒課長の田中忠夫、新生徒課長に大鳥居蕃、会計課長に渡辺良吉、人事課長に村川澄、庶務課長に西依六八を任命した。

1934年度の入学式が4月初めに行なわれ、130名が入学した。学園は平穏であるかにみえた。

ところが、5月23日、ある卒業生による渡部校長拉致・監禁事件が起き、辞職強要され、善次郎は5月30日校長を辞職した。そして、校長代理には5月30日に教務課長の田中忠夫が任命され、再び校長選りとなり、井上ら理事者側も反省し、次の校長は教授会の推薦を待ちたいということになり、10月6日、田中忠夫が3代目の校長に就任した。この時田中忠夫は弱冠36歳であった。

2) 生徒課長としての伊藤秀夫

田中新校長は校務体制として、教頭兼庶務課長に西依六八教授、新教務課長に前生徒課長の太田居蕃教授、太田居の後任の新生徒課長に伊藤秀夫を任命し、田中校長を補佐することになった。この時、西依六八が52歳、秀夫が51歳、太田居蕃が33歳で、秀夫は教授会メンバーのなかでは長老であった。こ

の新人事について、『松山高商新聞』編輯子は好適任として次のように高く評価している。

「田中校長就任により学園の基礎再びなり、久しく仰ぐ黎明の光は学園に限りなく喜びの花を咲かせる。教務課、生徒課、人事課と学内重要機関に各課長の就任を見るに及びては全く内容充実、更生の第一歩は踏み出され、過去を精算し、総て新しき人々により建設第二次工作のハンマーはうち下される事となった。

大鳥居生徒課長は未だ生徒課長の椅子、温まざる内に教務課長となり、総務部長を兼任すると云ふ全く生徒課長、教務課長、総務部長と鮮な三段飛びに超スピードの跳躍ぶりを示し、『不言実行』主義に底力ある手腕はますます研ぎ澄まされ煩雑なる事務を確実に処する事となる訳である。

尚新生徒課長、我等の『ゲー・ペー・ウー』は大鳥居教授の後を受け老練伊藤教授と決定し、好適任の世評に愈々機構充実の意を強くするものがある。

英国式ゼントルマン教育を以て氏の渋味、落着と共に人を射るが如き堅眼は、必ずや学生三百の『モンパパ』とし、又沈めの神となる事疑なしと実に適材適所とて学生一同大いに期待を懸けている」³³⁾

その後、秀夫は1947（昭和22）年2月までずっと生徒課長を続けた。誠に適任であったのだろう。

なお、1934（昭和9）年7月に、秀夫と同じ年に赴任した渡辺良吉教授が日印綿業輸出組合のインド代表委員に就任するために辞任している。

秀夫は故加藤彰廉先生の記念事業（銅像建設、伝記編纂、加藤記念会館建設、加藤奨学金の設定）のうち、伝記編纂の委員に任命されている。編纂委員

33) 『松山高商新聞』第98号、昭和9年10月30日。

長は星野通で、委員は秀夫の外、野中重徳、増岡喜義であった³⁴⁾

1935(昭和10)年度の入試が3月末に行なわれ、秀夫が英語の問題を出題、採点し、その講評もしている。講評としては結果は期待に外れず、例年より良い答案で、受験生が年々学力が向上したためと述べている³⁵⁾

1935年度の入学式は、4月10日午前10時半より挙行され、124名が入学した。田中忠夫校長の訓辞の後、伊藤生徒課長、大鳥居教務課長がそれぞれ所管事項について生徒に対し注意的説明を行なった³⁶⁾

1935(昭和10)年度の学級主任は、次の如くで、秀夫は担当していない。生徒課長職のためと思われる。

3年	A	村川 澄	B	西依六八
2年	A	古川洋三	B	星野 通
1年	A	高橋 始	B	増岡喜義

秀夫は『松山高商新聞』第108号に「専門外の専門」として能楽と謡曲について一文を寄せている。秀夫が謡曲を親しむようになった契機やその造詣の深さが分かるので長いが紹介しておこう。

「最近非常に隆盛に向ふた能楽もあれ程価値ある芸術であるが、明治維新後社会状勢の変動に伴って全く世間から顧みられず、其の道の人は糊口にさへ困り実に悲しむべき状態にあった。世人は能楽を亡国の遊戯だ、謡曲は亡国の声だと罵った。其間にも芸に忠実な楽師は芸に殉ずる心掛で研究と維持とに精進した其誠が報いられて次第に復興の機運に向ひ、最近は又反動的に非常な興隆を致し国家的保護を受け、遂に今では音楽学校の一

34) 『松山高商新聞』第100号、昭和10年1月1日。

35) 『松山高商新聞』第103号、昭和10年4月15日。

36) 同。

課目として研究されて居り、世間はこれを国粹保存だと云って居る。亡国の遊から国粹保存に転ぜしめられたのも御時節なのであろう。

私は幼少の頃に父の趣味から謡曲を習はせられたのが始まりで今に及んで下手の横好きだが、顧みて考へると私が此道に親しむのは国粹だからとか修養の為だなどとの理屈はなく只好むが故に親しむのである。只それが為に現実から脱けて夢の様な詩の世界とでも云ふものを味ふよすがとなれば沢山だと思ふ。『松風』を謡って柔かな月影が野分の須磨の浦を照らし、海人の呼び声の哀れさを思ひ浮かべ、又あの簡素な何の実感を伴ふ背景もない能舞台で『高野物狂』を観て『しんしんたる奥の院』に深山に鳴く深山鳥の鳴く幽玄さを想念し得れば沢山なので、仮にこれが亡国の楽と罵られても国粹の保存になるのも此芸術の真価に関係はないものと思ふ。

能楽や謡曲が斯く盛大になって、最近にはこれをトーキーにして外国に紹介する事になって既に着手されて居り、又各流派競って男女青年学生の間呼びかけ其為特別に学生能を催ふし毎度満員の盛況だと聞くのは私ども其道を愛する者にとってには実に喜ばしい事である。併し能楽の鑑賞は或程度の其道に就ての予備的教養を必要とし、始めて観てすぐに其味を十分に味はふわけには行かぬ。外国人すら非常にこれに共鳴する事が芸術鑑賞の素養乃至天分があったからであるが、併し能楽の音楽的又は舞踏的方面の美しい神技やこれによって湧き出る能楽全体の特殊な芸術的感銘を其当然の程度迄味はふ為には、夫々の部門に於て或程度を理解を必要とするので、只これを面白がる人の数が増したからと云って必ずしも其芸術的繁栄ともいえず、演ずる者自らが其技の真意義を悟って居るは勿論、観る人も聴く人もこれに就ての批判的鑑賞力を持つ様になって始めてこの芸術の真諦に参ずる事が出来る。

あの無表情其者の如き能面が演者の極めて僅かの（寸法には計量し得られざるほどの）顔の上げ下げで、如何なる写実的表現法よりも有効に哀楽の感情を観者の心に印象する工合や、謡ふ人の肉声がどんなに悪くても一

寸したノリ工合やハコビ工合で美人の声とも鬼人の声とも世捨人の枯淡な述懐とも聞こへると云ふ趣、乃至はハヤシ（太鼓、小太鼓、笛、大太鼓）の各が独立的に夫々の拍子を打つ『呼吸』（一種の超物理的な技）の合ひ工合などを理解すればする程段々に深い妙味を知る事が出来る。丁度山に登る人が始めは只山の雄大さと風景の美しさに全体的に何となく心引かれるが、山に通づるにつれて局部的の溪谷の美や道々の一木一石の皆其自然の姿に美を認め、遂に其夫々が総合的山岳美全体の必須なる要素となって居る事に理解を進め、其新しき理解の上を立てて改めて又山岳の崇高美に打たれると云ふ様なものである。

近年青年男女の間に斯道に対する新しい観方が起って新しい文学者や芸術家によってこれが研究の発表せられたものも多い。又専門学校以上の学校では謡曲クラブの設置せられて居るものも随分ある。東京ではこれにつき講演会も度々あり学生のみでの演能会も催ふされて居る。本校の学生諸君の内にも演能会でよく見かける人もあるが、諸君の間に此趣味が広くなる事は誠に望ましい事と思ふ³⁷⁾

1936（昭和11）年度の入試が3月26、27日に行なわれ、秀夫が英語の試験問題を出題し、古川洋三、三浦勸之助（英語、青山学院商業部卒。1935年10月赴任）が採点している。秀夫は近年高等専門学校の入試問題が難しすぎるとい説が多いので、その意見を入れて適度な問題を出し、目的は達せられ、概して中学校卒のほうが商業学校卒よりよく出来ていたなどと講評している³⁸⁾

1936年度の入学式は4月11日午前10時半より講堂にて挙行され、130名が入学した。田中忠夫校長の訓辞の後、伊藤生徒課長、大鳥居教務課長が生徒に対し所管事項について説明を行なった³⁹⁾

37) 『松山高商新聞』第108号、昭和10年10月28日。

38) 『松山高商新聞』第113号、昭和11年4月24日。

39) 同。

同年5月頃、松山市内で本校学生に扮するニセ学生が苦学生と称し出没して各方面に被害を与えていた。そこで、伊藤生徒課長が大街道に行き、本校の制帽、制服を着用した学生を問い質し、ニセ学生と見抜き、捕えるという痛快なニュースがあった。そして伊藤生徒課長は学生に注意を促す談話を発表した。その大要は次の如くである。

「ニセ学生なるものはまことに不都合極まる輩であり、今後とも警察と協力して十分注意する積もりであるが、この際、私が学生諸君に対し一言したいのはこんな不良なニセ学生に真似られるような本校学生であってはならぬということである。苟も専門学校の学生たる以上、その教養と矜持が自らその風貌、動作、態度の上に現れて、専門学校の学生らしいサムシングがあるべきである。幾ら服装を真似しえても、専門学校生徒の持つその教養と矜持はそんなに簡単に模倣されるべきでないとは私は考える。諸君は深くこの点に留意し不良徒輩に模倣追随されないよう、冒すべからざるサムシングを堅持されんことを切望する」⁴⁰⁾

同年7月12日、秀夫は文部省主催の国体明徴講習会出席の途につき、22日帰松した⁴¹⁾これは天皇機関説排撃の講習会であり、以降、国家主義、軍部の横暴が進んでいく。

1937（昭和12）年3月、秀夫も編輯委員の加藤彰廉先生の伝記が完成した。450頁にわたる菊版の立派な本であった。

1937年度の入試は3月末に行なわれ、定員100名、募集人員120名に対し、志願者は1,046名に達し、初めて1,000名を超えた。

同年4月、田中忠夫校長は、東京帝大YMCA時代の1年上の先輩で、マルクス主義者ために同志社を辞め失業中であった住谷悦治を採用している。軍国

40) 『松山高商新聞』第114号、昭和11年5月24日。

41) 『松山高商新聞』第116号、昭和11年7月24日。

主義化が進むなかにあつて、思い切った人事であつた。

同年4月12日午前8時から始業式があり、田中忠夫校長の挨拶の後、伊藤生徒課長が今後は一層規律を重んじ、節度を尊ぶこと、服装は厳重に規定のものを励行することとなつたから一般の注意を望む旨の説明をしている。また、その後、10時半から入学式が挙行され、田中校長の訓辞の後、伊藤生徒課長、大鳥居教務課長がそれぞれ所管事項の説明を行なつた⁴²⁾

本年田中校長は、就任後から温めてきた学校拡張事業計画を樹てた。それは、①生徒定員の増加（現在の300名を1938年度に450名、1941年度に600名に増やす）、②校舎の増築、③校地の拡張（隣接地1万坪を購入し2万坪とする）、④校内運動場の整備、造園、⑤講堂改築、⑥武道場改築、⑦体操館新築、⑧食堂改築、⑨寄宿舎増築、等であつた。そして、それらを順次実行して行つた。秀夫もそれらの事業を補佐したものと考えられる。

1937（昭和12）年10月27日より30日まで、秀夫は東京にて開催の文部省主催日本文化研究講習会に出席し、終わつて、31日より11月2日までの3日間文部省内の英語教授研究所主催の英語教授研究大会に出席した⁴³⁾

同年12月10日、秀夫の兄・丈夫が大阪にて逝去している。享年61歳であつた⁴⁴⁾

また、同年12月11日、学校では南京陥落を祝し、午前で授業を中止し、全校教職員、学生が加藤会館前に集まり祝賀式を行ない、終わつて提灯行列に参加した。

1938（昭和13）年度の入試が3月末に行なわれ、定員は本年度から1学年100名から150名に増員され、志願者も1,205名で前年を大きく上回つた。そして入学式が4月12日挙行され、180名が入学した。式で田中忠夫校長の訓辞の後、伊藤生徒課長、大鳥居教務課長から生徒に対し各所管事項の説明がな

42) 『松山高商新聞』第123号、昭和12年4月20日。

43) 『松山高商新聞』第128号、昭和12年10月25日。

44) 『松山高商新聞』第130号、昭和13年1月1日。

された⁴⁵⁾。そして、この年から3クラス体制にした。

1938年は本校創立15周年に当たる。そこで教授会は『松山高商論集』第1号、創立15周年記念号を企画し、12月に刊行された。秀夫は生徒課長のかたわら論文「イギリス国民性に就て」を執筆した。この論文は秀夫のイギリス留学の体験、イギリス社会研究の結晶で、イギリス社会、英国人の特質を見事に描いており、洞察力のするどさ、能力の高さを垣間見ることの出来る出色の好論文となっている。その大要は次の如くであった。

「一、はしがき

今次の事変〔筆者注：1937年7月の日華事変〕は我々に英国人の気質について一層正確なる認識を要求するように思われる。彼らは将来我々の友になるか、敵になるか、仮に敵となってもその国民性について学ぶべきものがあれば他山の石としなければならない。今や我国は皇威を八紘に輝かす大使命に乗り出した。この際、イギリスが何故世界的大国民となったかについて知ることは大変重要なことである。

私は数年前ベルリン大学の英文学部教授ヴィルヘルム・デイベリウスが1922年に出版した「英国」という書物を手にした。氏は世界大戦中にドイツ国民がその敵たる英国の真の姿を知らずに戦っていることを嘆き、自国民に英国及び英国民が如何なるものであるかを知らしめるために著したのである。不倶戴天の敵の長所短所を明確に認識する必要があるという教授の考え方は大変立派なもので、敬服に値する。教授の示唆からまとめたものが本小論である。

二、概観

一国民の国民性について総括的に概観をつかむことは難事である。況んやあらゆる矛盾せる性質を平気で持っている英国人においては尚更であ

45) 『松山高商新聞』第134号、昭和13年4月25日。

る。極めて大づかみに見てみよう。

英国人は思考内省に長ぜず、実際的で常識を尊び、共同生活を愛する。自主独立心が強く、個性の自由を主張するが、その個性の主張は保守主義と結びつく。英国人は食事よりもスポーツを好み、正々堂々事に当たり、トリックを用いることを極度に排斥する。

英国人は『その事について君と僕は意見が違ふということ意見が一致した』とよく言うが、それは意見の一致しない点は暫くその儘にして、他の諸点について協議しようという意味である。難問題をうまくまとめて反対者を知らず知らず妥協に導くのが英国人の偉大な手腕であると新渡戸博士が言われたと聞く。これは相手を自分の説に屈服させるのではなく、相手にも主張させるというスポーツマンシップと見るべきである。又同時にこの態度は自制力を必要とする。英国人は自制力が強いので自由を尊重しながら秩序ある国家を維持し得るのである。自制ある故に秩序あり、秩序ある故に自由がある。ハイパークの日曜の午後には多数の演説家が、政府、資本主義、キリスト教、共産主義、救世軍その他あらゆる問題について攻撃もし、宣伝もし自由に論じているではないか。又英国人は慎みを忘れず、でしゃばることを嫌うので、自然無口無愛想であるが、これは相互のプライバシーを尊重するからである。又、英国人は紳士で礼儀第一で、服装、言動に礼儀正しい。又、英国人は論理的な民族ではない。相反する信念を平然と併存させている。例えば、動物虐待防止会の熱心な会員がスポーツの名において狐狩や雉子打ちをやる。又、英国人は金銭問題に正直潔白で、節操を尊ぶ。最後に英国人は保守的である。彼らは何事でもこれを改変する十分な理由がなければ改めない強い保守性がある。英国の社会が今日あるのはこの保守性に引かれ、徐々の歩みを順序を追って進めた結果である。そのゆったりした性格は英国人の気質である。英国人は難局にあたって、必ず打開出来るもの思っていてゆったり構えて焦らないのである。

三、民族

英国人の性質の雑多性はその祖先たる諸民族の特性の混じたためであると言われている。英国には始めケルト族が居た。この民族は紀元前50年頃ローマ人に征服された。ローマ帝国が衰えると、デンマーク地方に居たジュート人がケント地方に侵入し、又、ハノーヴァ地方のサクソン人が海賊となってウェセクス地方やサクセス地方に侵入した。ついでアングルズがシュレズウィッグ・ホルスタイン地方から来て領土を占領した。829年にエグバード王がこれらを統一してアングロ・サクソンの英国民らしきものが出来た。アングロ・サクソン人は郷土サクソニ土民の性質として物質的で粗野、質実剛健、自由独立を重んずる気風をもった。土着のケルト族も各地に残存してその空想的で情熱的な点がサクソン人の血と混じった。9世紀にスカンジナビア地方に居たノルマン族のデイン人が英国の東北部に侵入した。これは海賊であったが、それにより、元来海賊的素質を持っていたサクソン人に再び海賊的海上冒険主義の気質を呼び起こした。1066年にノルマンディー公が大軍を率いて侵入し、英国王となった。このノルマン人は長くフランスの文化に接していたために英国にフランス語のみならずフランスの文物制度、特に封建制度が伝えられた。王に従ってきた軍隊は英国の支配階級となり、又、商工業に従事した。現英国人はこれら各種民族の雑婚によって出来たものであるから、それぞれの民族、種族の特質が英国人の血に流れている。英国ではあらゆるものが折衷である。

四、階級

ウィリアム公以来、その封建制度の政治によって人民の間に階級意識が出来た。これが階級尊重的・貴族主義的気質として今日まで存在している。デモクラシーの本場といえる英国であるが、階級を重んじる風潮と少しも不調和を来していない。英国社会は温順な下層階級の広き土台の上に建てられたピラミッドに比することが出来る。頂上の階級は王族である。

階級を分類すると、第一階級＝皇族、第二階級＝貴族（a 称号ある大地

主、b 称号あれども土地少ないもの、国家社会に功労があり国王より称号を受けたもの)、第三階級=上流階級(a 地方的大地主、b 自由職業者)、このbが厳密な意味でゼントルマンであるがその上下を含む。第四階級=中流階級(a 中流の上層、b 中流階級の下層)、第五階級=労働者階級、に分けられる。

五、個性尊重

英国人は個人主義者だと信じられている。しかし、自己の利害を第一にする民族と解するならば誤りである。英国人は自らを個人主義者と言っているが、利己主義者だとは言っていない。彼らの個人主義は彼らの特質である保守主義、共同生活を愛する性質を伴っているので中和せられ、自制せられており、利己主義とは全然別物である。

英国人は抽象的な社会、国家よりも自分達と同じ生活を経験している具体的な個人の実生活に興味を示し、歴史よりも伝記を好む。文学も倫理的、社会的なものよりも人物の物語を好む。英国人は自分の個性を尊重すると共に他人の個性をも尊重する。自己主張のために他の個人の主張を圧迫することを好まない。英国人は他人の私生活やその言動に干渉することを排斥する。

お互いの個性の主張を認め合う場合、その対立が烈しくなれば共同の社会生活ができはせぬかと思われるが、英国人は論理のみを推してその結果を顧みぬということはしない。論理のある段階において、彼ら特有の妥協性に助けられて、衝突、破局をみずによく折衷されて、中庸を得、中道を進むのである。

英国人の個人主義は共存的社会生活と対立するものではない。英国特有のパブリック・スクールやケンブリッジ、オックスフォード大学などの教育方針をみればよくわかる。パブリック・スクールで教育の手段として用いられているのはスポーツと集団生活である。スポーツは他国に見るような記録を破るためにするのではなく、心身の鍛練と共に人の上に立つ指導

能力の養成と指揮統制に服する念を養成するにある。スポーツは主として団体スポーツが重視され、戦に不正を弄せず、勝利を誇らず、敗北を甘受する正々堂々たる精神を養う。なお一層大事なことは同じチームに加わることによって自己を個人としてでなく全体の一員として、全体のために奉仕する精神を涵養するのである。この精神がやがて社会人として、社会のために奉仕し、国家の名誉のために戦うという滅私奉公の誠となるのである。スポーツを通じて得た勇氣、敢行、決断などの体験は国内の平和な生活のみならず、海外での植民地行政の第一線にたち、堅忍不拔の行動をなす素地となる。ネルソンが空前の大勝利をもたらしたのはイートン時代のスポーツのためであった。

次に学校は団体生活の訓練の場である。生徒は皆集団生活をする。ここに校長、教師が同居して生徒と起居をともし、教師として、友人として生徒を指導、鼓舞する。上級生は下級生を指導する。処罰権もある。かかる軍隊式の訓育制度は個人主義の国にもかかわらず古き伝統として少しの摩擦もなしに行われる。かくして後日、人の上に立ち、人を指揮する要領も、人の下に居て使われる場合の心得も訓練されるのである。

六、実際の・常識的

英国人は実際ので実用主義の常識を尊ぶ。純理から論理的結論に達するよりも個々の経験から帰納的に結論を導く。ベーコンやミルなど帰納論理学者が輩出したのは当然であった。法律も普遍的なマクスムを立てるよりも特殊なものをも重視する結果、慣習法、不文法を重視する。学術面でも彼らの哲学は形而上学ではなく、主として人間に関する心理学・論理学が中心である。哲学も实际的なる政治学や経済学等に哲学的基礎を与える点に中心を置く。ベーコンやロックが観念の起源は総て経験にありと言ったのも、またダーウィンがすべての進化をスツラグルとアダプションに帰したのも英国的であった。英国学問の実際主義的傾向は生活の上にも多く現れる。英国人は具体的なものを喜ぶ。論理で人と争うよりも不一致点はそ

のままとし、他の一致点に見いだそうとするのである。

七、保守的

元来アングロ・サクソンが保守的な性質の上に、英国では急激な変化が起こらなかったために、保守性が英国国民性の大きな特質となっている。社会の古い伝統がそのまま保存されて20世紀にも続いている。議会の古い儀式、法官などの18世紀風のかつら、大学生の17世紀式のガウン、パブリックスクールの制服、軍人の中世期風の服装、等々。

しかし、英国人は決して進歩、改良を忘るはしない。今までの古き方法では善処し得ない場合、英国人は焦らず、迫らず、これによく対処した。例えば社会主義思想も資本主義思想の中に取り込み、工場法(1833)、労働組合公認(1842)、選挙権拡張(1867, 84, 1918)等を制定し、大事に至る前にうまく解決した。保守というものは絶対的なものでなく、あくまで現実的で進んで実際と妥協するのである。

中世の武士道思想も保守的な英国で保存されている。君主への忠誠、生命よりも体面重視、婦人への尊敬、衣服、挙動の端麗さなどの中世武士道は今も英国人の中に生きているのである。忠君思想は英国政治において重要で、英国人は一度選んだリーダーには忠誠をつくす。英国の官吏が正直で金銭上潔癖なのは武士道精神の現れである。女子が尊敬されるのも武士道精神の現れで、それが他の一般階級にも及んだ。道徳法、社会法重視も武士道精神の現れである。

英国国民の保守的傾向は諸種の新思想、新運動にのまれる危険から英国国民を救ったのみならず、ある段階にいたればその保守思想にかかわらず手際よく革新に着手し中庸の道をすすめ、新しいものを取り入れ消化していく。これが英国国民を大なる国民にした理由である。

八、紳士

中世の武士道思想が近代に入って近代色を帯び、ここに紳士なるものが出来た。紳士は階級的には貴族階級の次にあるが、若干の土地を有し相当

の収入のあるも郷土風のもので一種の貴族である。しかし、だんだんデモクラティックとなり、その範囲が拡大し、自由業者や大学教育を受けた人などを含めるようになり、中流階級の上層は皆紳士と言われるようになった。紳士はある程度土地を持ち、次の様な気風を持っているものである。即ち、知的において必ずしも高邁な学識を必要としないが、常識豊かで実際的で実行力を有し、明朗で気宇が大、自主独立の精神に富み、学生時代の共同生活の体験から和協一致の精神を有し、スポーツマンシップにより正々堂々とした精神を有し、礼儀作法に厳格、自己吹聴や多弁を排し、他人の意見を聞く、騷擾を嫌い静寧を愛す、正直にして約束を守り、金銭に厳正な人、又、快活で実行力を有し、英国の内地や植民地の第一線で活躍する人である。又、紳士は、親切と謙讓、何の見返りなしに社会に奉仕する精神を有している。

九、情熱

英国人は落ち着き払って、冷静で親切、ヒューマンであるが、一旦怒ればライオンの如く猛烈となり、そこには古代北欧の海賊の情熱が潜んでいるのである。英国人は世界中に植民地を持つ征服者であり、幾多の冒険家、発明家を出しているが、これはこの情熱が権力欲、冒険心の形にあらわれたものである。情熱は野望の元である。かれらが好むスポーツは勝負を争う性質のものを主としてその勝負に金銭をかけねば本気にならぬ風もこの情熱性による。古来アングロ・サクソン王のなかには暴政を行い、骨肉争い残忍な処刑をするなどしたものがいたが、これも情熱の現れである。

8、9世紀の海賊デイン族、11世紀のノルマン族の血がアングロ・サクソンの中に流れ、16、17世紀の清教主義にも流れた。清教徒ミルトンは英国民を選ばれた民とし、世界の文化の低い国民を教化する使命を持つと宣した。この思想は始め中流階級に信奉者を持っていたが、上流、紳士階級にしみ込み、やがて帝国主義思想を生んだ。しかし、18世紀に入りこの帝国主義思想は緩和された。一旦敵を屈服せしめれば、相手の生命を

助け、手をさしのべ寛大な認容と献身的な助力を申し出る。

十、宗教心

情熱は一方で超理知的なものへの敬虔の情・宗教心である。英国人が宗教心に厚いことは国家的・社会的儀式行事から個人の日常生活の上にもあらわれている。

十一、感傷性

英国人の宗教心の現れとして感傷的な心持ちを挙げる事が出来る。英国人は監獄改良、動物虐待防止、禁酒運動、救世軍運動等、苦しめるもの、悩めるものに対する同情心は頗る旺盛である。これが貴族や上流階級に義務として巨額の金を義援するのである。

十二、自然愛

感傷性は自然愛となってあらわれる。イングランド地方は高い山も広い平野もなく、全部ゆるやかな波状の起伏をなし、至るところに牧場があって常緑の芝生の上に牛、羊が遊んでいる。緑の生け垣が畑の間を這い、道路の両側も灌木の生け垣である。又、茂りに茂った大木があちこちに転々とし、全く絵のようである。全体が一大公園である。この大公園の間には小さな村が散在し、古い寺と地主の古雅な邸宅がある。英国の田舎は立派な芸術品である。自然と芸術の完全なる一致である。英国人には自然をなるべく損じないように、自然に対する思慕が強い。

十三、芸術心

实际的、物質的、商人の国民である英国人は芸術に冷淡で、その能力もないように見えるが、それは誤りである。英国人は種々の草花に詩味豊かな名を付けている。また、民謡や舞踏は民衆の詩的・音楽的情緒のあらわれである。空想的・詩的・音楽的素養において他の如何なる国の民衆にも劣らない素質があることを示している。

十四、むすび

英国人は全体としてやさしい国民である。芸術に対する美観も、自然に

対する愛着・憧憬もある。英国人は伝統を尊ぶ、保守的である。英国人は保守的であると共に個人主義的で外部からの圧迫や権力に反抗する。伝統尊重と個性主義の調和、全体的なものとの調和、中庸を取る手際よさ、これらは英国人の長所である。

この保守主義・伝統万能の英国も世界大戦の影響により国民の考えは変化した。女性に参政権が認められ、文明を破壊すると言われた社会主義者も有力な政党になり、産児制限も保守的な国教会から認められるようになった。

英国の3大政党は3つの思想を反映している。自由党、保守党、労働党である。自由党は国家の統制より個人の自由を主張したが、19世紀半ばから労働者が資本家の奴隷となっている弊害をさとり、労働者の利益のために働いた。保守党は国家の重要性を認め、伝統に従い貴族の利益を図ったが、時代の進歩に目覚めて民衆の利益を図ることもした。労働党は社会主義を主張したが、他国の如き急進的な手段は取らず英国の漸進的改革を主張し、保守党の主張に近づいた。現今ではある程度までの国家統制は必要で全くの自由主義は空想であるというのが英国人の常識である。

英国では国民の思想が極端に走らず頗る着実に進んでいる。その伝統的な個性の自由やデモクラシーを失うことなく進んでいるのは、伝統的な国民性によりあくまで実際に則し、極端を避け、妥協して中庸の道を選んだためである⁴⁶⁾

以上の如き英国の国民性について、秀夫も共感を感じ、自らも身につけようと思ったものと推測される。

1939（昭和14）年度の入試が3月末に行なわれ、定員は前年と同じ150名で、志願者は1,502名で前年をさらに上回った。そして入学式が4月初めに行

46) 伊藤秀夫「イギリス国民性に就て」『松山高商論集』第1号、創立15周年記念号、昭和13年12月。

なわれ、183名が入学した。前年と同様に3クラス体制とした。なお、学級主任は、次の如くで、秀夫は生徒課長のためと思われるが、担当していない⁴⁷⁾

3年	A	増岡喜義	B	星野 通	
2年	A	三浦勸之介	B	住谷悦治	C 太田明二
1年	A	川崎三郎	B	賀川英夫	C 浜田喜代五郎

秀夫は『松山高商新聞』第151号（昭和14年12月22日）に住谷悦治教授（経済学、文化史等担当）が同紙149号（昭和14年10月30日）に載せた文化時評「職業の公共性」を読んだ感想を投稿している。それは住谷教授の時局・全体主義迎合と受け取られかねない見解－戦時統制経済の進展を契機として生産とか労働とか職業とかの概念が個人主義的理解から脱して、国家・協同体との関係で把握されねばならぬとし、職業の公共性を強調した－に対し論評をしたものである。大要は次の如くで、住谷教授の真意を好意的に理解すると共に、秀夫の良心の人柄、文化に対する深い理解を読み取ることができる。

「住谷教授が職業の公共性を強調し、従来の個人主義的立場に立った職業観が是正されなければならぬことを主張されたことは時局に有益なことである。しかし、第1に教授が個人主義と名付けたのは利己的個人主義のことで、他に全体主義と矛盾せず社会国家に忠実な個人主義も存在し得ることを否定していると解するならば大いに誤解である。オーケストラにみられるように個体の完成による全体調和の意味において全体主義が存在し得る。吾々はこれの達成を理想とすべきであろう。

第2に心なきものが皮相的に解釈して芸術家や学者の職業をあなどるようなことがあるならば、これも住谷教授の真意を解しないことになる。職

47) 『松山高商新聞』第144号、昭和14年4月30日。

業の公共性を云う場合、如何なる職業を公共性ありと定めるか。私は社会の為、国家の為と云う場合、余りに物質的生産に直接関係するものを指しすぎる傾向がありはしないかと疑う。音楽家、詩人、画家などの芸術家の価値は往々時局向きの作品の故にのみその職業の公共性を認めるのみでなく、むしろ一見これに反するかも知れぬが良心的にして、一層本領を發揮したる自由なる作品に高級なる公共性を認めるべきでないだろうか。

今日の時勢にも芭蕉の存在が侮られるべきでない。芸術のための芸術にも公共性がある。生産階級的職業のみ公共性を認め他を非公共的と侮る社会は決して健全でない。世の中に住谷教授の主張を皮相的に誤解する憂いが多分に存在する。教授もこの点をご用心あってしかるべきと信ずる」⁴⁸⁾

1940（昭和15）年度の入試が3月23、24日に行なわれ、定員150名に対し志願者は1,491名で、前年より若干減少し、4月11日に163名が入学した。

7月19日、田中校長は学園拡張計画にもとづき、文部省に対し、定員を1学年150名から200名に増やす、本科を1部、2部とし、2部を東亜科とする、2部の東亜科は支那語を第1外国語とする、カリキュラムも東洋文化史、東亜経済事情などの課目を必修とする規則改正案を申請し、9月4日に認められ、1941年4月から実施されることになった。時局迎合のカリキュラム改革であった。

11月10日、近衛内閣は紀元2600年奉祝典（昭和15年が神武天皇即位から2600年に当たるとされて、祝典を行なった）を宮城広場で開催し、翌11日には全国の生徒代表3,000名が参集する奉祝会に参加するために、本校からも生徒課長の秀夫が3年生の生徒2名を引率し出席した⁴⁹⁾

秀夫は『松山高商新聞』第160号に第一高等学校長安倍能成著『青年と教養』（岩波書店）の紹介・書評を載せている。安倍の青年学生に常に同情に満ち、

48) 『松山高商新聞』第151号、昭和14年12月22日。

49) 『松山高商新聞』第159号、昭和15年10月31日。

しかし決して媚びることのない忠言を与えていることを高く評価している⁵⁰⁾

また、秀夫は『松山高商論集』第3号、皇紀二千六百年記念号にイギリスの哲学者、論理学者、数学者、教育者、平和活動家のバートランド・ラッセルの「教育者の任務」を翻訳し、掲載している。ラッセルの主張のエッセンスは、第2次世界大戦前夜の時代、ドイツ、ロシア、イタリアの全体主義・狂熱的国家主義の下で、多くの教育者が権力者に阿諛追従していることを批判し、教育者の任務－国家からの知的独立性、国際的教養、不偏不党、公平無私の研究態度、文化、文明の擁護、他人を理解せんとする寛容心、等々を説いたものである。このラッセルの主張に対し、秀夫は、付記で「私は決して彼の説に全く同感すると云ふのでもなく、又其説は（私は全部には同感なし得ぬけれども）真理であると主張したいものでもない」⁵¹⁾と慎重に述べているが、1940年代の情勢の中で（9月に日独伊3国同盟が結ばれ、10月には大政翼賛会が結成）、全体主義と闘っているラッセルの論文を翻訳することは心情的にラッセルに共感していることのあらわれで、勇気ある翻訳と評価できよう。

1940年12月16日、田中校長は文部省の指導方針に従い、学園新体制樹立のため、校友会を解散し、報国団を結成した。学園の戦時体制化であった。団長は田中校長、総務部長は西依六八、鍛練部長が星野通、国防訓練部長が土屋靖民大佐、文化部長が住谷悦治、そして、生活部長が秀夫であった⁵²⁾

1941（昭和16）年3月8日に第16回卒業式が挙行され、147名が卒業した。秀夫が「巣立ち行く人々に」と題し『松山高商新聞』第163号に餞の一文を草している。それは次の如くで、人類は平和を熱愛するに決まっている、今の戦争は遠からぬうちに終わる、戦後には恐ろしい失業問題が起きよう、その大嵐に備えよというものであった。秀夫の生徒への思いやりが窺われる。

50) 『松山高商新聞』第160号、昭和15年11月30日。

51) 伊藤秀夫訳「バートランド・ラッセル氏『教育者の任務』」『松山高商論集』第3号、昭和15年11月。

52) 『松山高商新聞』第161号、昭和15年12月24日。

「就職難を知らぬ諸君の幸福を特にお祝いする。併しこれだけですましては居られない。第一次大戦後の平和熱、平和への人類の希求が大戦を終わらせたが、平和熱が旺盛だったのも戦後十年ぐらだった。第二次世界大戦は人類が好戦的であるために起こったのでは無く、戦争を憎む心が余りに強く、その責任者を罰すること余りに酷であったために起こったのである。二十年を経て世界大戦が再度起こったのは人類が平和を好まぬ為と思うべきでない。人類は平和を熱愛するに決まっている。その中で主役の一人をつとめている我国の戦争状態は遠からぬ内に平和に復する。畏れ多くも度々の聖勅に東洋乃至世界の平和を希求し給う大御心が拜せられているでないか。平和が訪れた場合、産業界はどうなっているか、第一次大戦の結果を想起されたい。世界はあの恐ろしい失業問題が繰り返されよう。この大嵐の折りにも倒れぬ丈の根強さをもっていなければいけない。その頃諸君にも妻子がいるであろう。その際諸君を守る武器は健康と人格である。高等教育を終えたという人格、教養、手腕である。眼前の順境のとりことなり、徒に此の春に酔うことがあれば、冬の木枯らしが吹きすさぶころにどんな運命にあうだろうか。就職直後に高商出身者に対する期待を裏切らないように精進してもらいたい。大嵐に堪えるためには一晩や二晩の徹夜では足りぬ。順風の日々の今、熱心な忠実さと不断の修養、研究による学問が生み出す信用のみが始めて諸君をして大嵐を切り抜けさせるだろう。また例のお説教かといわれるが、おめでたき日に当たって、この苦言は親愛の現れであり、気持ちよく読んでいただきたい」⁵³⁾

1941（昭和16）年度の入試が3月末に行なわれた。定員は本年度から1学年150名から200名に増大し、また東亜科も設置されたため（1部150名、2部東亜科50名）、志願者は2,885名に上り、前年の約2倍の狭き門となった。

53) 『松山高商新聞』第163号、昭和16年3月28日。

4月12日に入学式が挙行され、228名が入学した。田中校長は「東亜共栄圏」を確立し、その盟主に日本が立つことが「日本が永遠に生き抜くべき唯一、必然の道」と断じ、新入生に覚悟を求める訓辞を行なった。なお、入学式の前々日の4月10日午前8時より講堂において1941年度の始業式を挙行した。そして、この始業式において田中校長は訓示を行ない、そして、校訓「三実主義」の「明文化」と「確定解釈」を行なった。まず、訓辞の要旨は次の如くで、加藤校長の「三実主義」を讃え、生徒に規則を守り、自覚を求めるものであった。

「学園内外の拡充による学校の発展は誠に喜ばしいことである。支那語科の新設に伴ふ新校舎、或いは造園計画による外観の拡張と共に生徒数の増加により学校は益々進歩して行く。本校の三実主義は実に現下の時局に最も適応した名訓であり、加藤初代校長の明晰多識なる御人格に感歎せざるを得ない、多数の者を擁する学園に於てその統制を完全ならしめ以て教育の目的を達せんが為には規則を生徒自が守ることより道はない。本年度より特に遵法精神の強調を要請する。然し伝統を誇る特殊の学風、即ち家庭主義は益々これを尊重し、明朗なる学園建設に進む事は言を俟たない。経済新体制の漸く確立されんとする時諸君の自覚殊に深くその責務に向つて邁進せんことを願ふものである」⁵⁴⁾

そして、田中校長が時局に対応した校訓「三実主義」の「明文化」と正しい解釈を行ない、それを「昭和16年度の生徒要覧」に発表した。それは次の如くであった。

「真実—とは真理に対するまことである。皮相な現象に惑溺しないで進んでその奥に真理を探り、枯死した既成知識に安住しないでたゆまず自か

54) 『松山高商新聞』第164号、昭和16年4月25日。

ら真知を求め、伝統的陋習を一擲して潔よく真理に殉ぜんとする態度のことである。換言すれば旺盛なる『科学する心』に外ならない。

实用—とは用に対するまことである。広い意味では真理を真理のままに終らせないで、必ず之を生活の中に生かさんとする積極進取の実践的態度である。最近叫ばれつつある日本の真理研究の運動も、日本的用を重しとする清新な实用主義であるといふてよいが、本校のそれは、さらに一步を進めて自己の職域に対する用を求めんとするもので、最も切実旺盛な実践的態度である。

忠実—とは人に対するまことである。人のために図つては己を虚うし、人と交わりを結んでは終生操を変えず、自己の言行に対してはどこまでも責任をとらんとする重厚な態度のことである。かくて深く人を信ずると共に、人をして深く己を信ぜしめ、信を以て人と人を結ばんとする清き温かき情誼の精神である。

これを要するに、一つには客観的真理を自己の職域における实用面に即して探究し、この結果をその職域に生かしてまことをつくすと共に、二つにはその探求実践の母胎たる社会の結合を、人と人との信をもつて鞏固にし、かくて社会的努力の成果を、全体として強大ならしめんとすることが本校の三実主義なのである。

而うしてこの真と用と人との三者に対して一つのまこと—実を貫くことが、実にわが三実主義の要諦なのである」⁵⁵⁾

田中校長が校訓「三実主義」の定義の明文化を行なったものの、以後の日本の歴史と学園の歴史はこの「三実」が真の「三実」ではなく、時局迎合、軍国主義・全体主義に転変せしめられていったことを物語っている。

『松山高商新聞』第164号（昭和16年4月25日）に、「教授の横顔探訪」と

55) 『松山高商新聞』第164号、昭和16年4月25日。

して、編輯子の質問に秀夫が答えている。1、処世訓或いは人生観について、別に処世訓などと云ふ名を付けて居ませんが、凡ての人事交渉に於ては必ず一応地を変って相手方の立場に立ってから判断したいと云ふことは常に考えて居ますと答えている。2、最近読んだ書籍のうち、感銘深きものとして、ジョン・スチュアート・ミルの『自叙伝』などをあげている⁵⁶⁾軍国主義・全体主義化が進むなかでも、秀夫は相手の立場を常に考えるリベラルな態度を保持していることや自由主義者ミルを信奉していることが窺われよう。

1941（昭和16）年7月25日の『松山高商新聞』第167号に秀夫は「聖戦」と題した一文を草している。その大要は次の如くで、秀夫も「聖戦」を信じているが、ここでも相手を尊重するリベラルな精神を保持していたこと、戦争が早く終わることを願っていたことがわかる。

「皇軍の使命は聖戦を戦うにある。そしてその成績実に顕著、世紀の驚異である。銃後の使命は世界をして聖戦を信ぜしめるにある。併しその成績十分ならず、皇軍に相済まぬことである。相手に我が真意を理解して貰うのは難事中の難事であるが、そのためにはまずあの人のお話ならば聞いてみたいという気持ちを相手にもたせられる信用ある人間になって始めて聞いて貰えるのである。次に我々は相手が如何なる気持ち、如何なる理論で我々の行動を批判しているのかを十分に理解しなければならない。相手の気持ちや諸説を寛大な気持ちで傾聴、理解した上で、駁すべきである。この用意のない敵愾心や愛国心は往々空威張り、独りよがりに過ぎない。

我国の聖戦の意義、近衛声明の本意を欧米諸国に理解してもらうことは並大抵でないが、我々銃後の国民、特に知識階級はどうしても我国の人道的な戦争哲理を欧米諸国に理解せしめて、事変を一日も早く解決したいものだ⁵⁷⁾

56) 『松山高商新聞』第164号、昭和16年4月25日。

57) 『松山高商新聞』第167号、昭和16年7月25日。

1941（昭和16）年は創立18周年にあたる。『松山高商新聞』18周年記念特集号を組んだ。その中で、生徒課長の秀夫が「緑化された学園」と題した一文を草している。そこでは、田中校長が取りくんだ「日本一の高商」を目指し学園を発展させてきた計画が着実に進展し、整備されてきている状況を巧みな文章力で描いている。又、新田長次郎と加藤彰廉の銅像の記述があるので、少し長いが引用しておこう。

「卒業生諸君は昔から校友会予算の中僅少の金額が学園緑化の基金として積立られて居たのを御承知でせう。併し何年たっても一向目にたつ程の緑化が出来ず学校は焼け野原の感がして先生も生徒も多大の不満を感じて居たが、本学年に入って新田家の特別の御好意で巨額の金を緑化の為に提供して下さって大阪市公園課の技師の設計により、同じく大阪から実地の技術者が来松、久しきに亘りて其工事に当り、此秋大体の施設が出来上った。玄関を始めとして中庭から運動場、扱は新たに広くなった校地周囲に至る迄本当に気持ちよい緑の学園を作り出した。本校舎の中庭には中央に広い池を設け、鯉を放ち、睡蓮をしつらえ、その四周は石畳と芝生。御承知のあのクロイスタに沿ふては棕緞の並木、西寄りに東面している温山先生の銅像はいままでと違っていかにも居心地よげにみうけられる。

小春日の暖かい陽を浴びて若い女事務員が池の傍らに立って無心に鯉を見入る風情を想像して見て下さい。コンクリートのやゝもすれば殺風景に見ゆる校舎には蔦が這って四時折々の色取りでこれに和現の和かみを添へて居るから安心なもの。今年は天候の為か虫害があつて秋の紅葉がいつもの通りには参るまいと気づかされるが其枯れた姿を哀れとこそ思へ、ゆめきたならしと思ふべきでない。洋式建築にはなくて叶はぬ蔦である。又多くの諸君の御承知ない新教室二棟と講堂との間にはさまれ、東西にわたり整然たる洋式の芝生と花壇があつて、西の方、加藤会館前の庭園につながる。この会館の東から正面につらなる特別庭園は少しく小高く盛り上がった

た芝生に、松、蘇鉄、躑躅などを植え込んだもので、東寄りの正面の程よいところに加藤先生の知性あふれた温容が仰がれる…」⁵⁸⁾

現在の松山大学の1号館と5号館と本館との間に小池があり石畳で囲われているが、この時に作られたものであることがわかる。また、長次郎翁の胸像が東に向かって置かれていたこと、彰廉先生の胸像が加藤会館前に置かれていたことがわかる。

1941年11月15日、16日、秀夫は東京での英語教授研究会に出席した。

『松山高商新聞』第169号（昭和16年10月25日）に、編輯子が「教授漫描」を記している。秀夫について「英語を教へられる伊藤秀夫教授は冬の夕赤々と燃える炉辺にどっしり落ち着いた椅子に腰かけ本を読んでいる白髪頭の上品な老紳士と云った感じでその中に親しみと近寄り難きとが内外を形作っている。立派な英語の発音には頭が下がる」⁵⁹⁾と評しているが、言い得て妙である。

1941（昭和16）年12月8日、日本はついに日中戦争から太平洋戦争に突入した。その高揚した時期であるが、生徒課長の秀夫は『松山高商新聞』第171号に「東亜共栄圏に戦ふ経済戦士に寄す」と題した一文を卒業する学生の為に草している。その大要は次の如くで、他人の人格・支那民衆を尊重せんとする秀夫のリベラルな精神を感じさせられる一文である。

『桜の国』を新聞または映画で見た人は多かるう。笹間三郎は支那で事業を始めて生甲斐を見いだしたとして恋人との婚約を破棄して支那に渡った。この三郎の態度を男らしいとは認する人がいるが私は男性として抗議する。男らしいというのは利己的な男でないことだ。これは悪しき個人主義だ。その理由が時局的であるからといって正当化はできない。日本古来の武士道精神から他人の人格を尊重する心を除いてなにか残ろう。不幸な

58) 『松山高商新聞』第169号、昭和16年10月25日。

59) 同。

境遇にある弱い性格の女性の人格を無残に無視する様な男が支那の民衆を宣撫して皇国聖戦の本旨を納得せしめ得るであろうか。人格の尊厳を尊重しない人間は必ず支那民衆の人格も尊重しないだろう。支那事変は東亜戦争に拡大した。我が国民は東亜7億の民衆を率いていかねばならない。相手が弱者で不幸な者、文化の後れたものであればあるだけ我々は彼らの人格を尊重する高貴な心の人でなければならない。笹間三郎式の青年はこの聖職に適しない。我々は欧米人を侮るのではなく、彼らが支那民衆の間に得たる信頼の源に十分な理解をもたなければならない。然るに、満州でも支那でも日本人が皇軍の目的を裏切る行動をなすものが多く、日本人の品位を落としているのは遺憾千万である。卒業生諸君が東亜共栄圏、諸民族相手の業務につかれることは名誉であると共にその責任は重大である。諸君に日本人のよい見本として、日本人信ずべしとの気持ちを相手に抱かしめるよう責任がある。諸君は自己の教養を怠らず、他人の人格を尊重し、新東亜建設の聖業に男らしく献身努力せられたい。断じて笹間三郎であってはならぬ⁶⁰⁾

しかし、1941（昭和16）年12月の太平洋戦争の突入以来、次々に学園に戦争の直接的影響が及んできた。文部省の突然の指示により、1942年3月の卒業予定が3ヶ月繰り上げられ、第17回卒業式が12月26日に挙行された。このときの卒業生の一人に住谷教授の指導を受けた土岐坤（1938年4月入学）がいる。

1942（昭和17）年度の入試が3月5、6日に行なわれ、定員200名に対し志願者は2,653名もあり、前年と同様、狭き門となった。4月1日に入学式が挙行され、222名が入学した。田中校長はこのたびの戦争を「世界再建のための戦争である」と論じた。

60) 『松山高商新聞』第171号、昭和16年12月30日。

それに対し、秀夫は『松山高商新聞』第173号に、「大東亜戦争に因る偶感」なる一文を寄せた。その大要は次の如くで、日本は東亜の盟主として生きていくためには、武力ではなく、英帝国が属領や植民地にとった政策に謙虚に学ぶべきことを論じたものであった。ここにも秀夫のイギリス留学の際に培ったりべラルな見識が見受けられよう。

「大東亜戦の皇軍の戦果は本当に驚異的で、日本に生まれ、この時代に生まれたことを感謝せねばならない。しかし退いてこの大戦果、また今後の戦果をして真に有終の美を得るにはおそらく世界の諸民族直面するよりもはるかに困難に直面しよう。この問題の解決には爆弾、水雷ではなく、我が国民的教養、すなわち凡ての方面での学問に根拠を置いた政治的経済的・道徳的な統治策以外に道はない。新たに我が指導下に入る無数の民族の文化程度や人種の雑多にともなう宗教的信仰の対立等を考慮した上での指導開発が如何に困難であるかは想像以上であろう。『フィリピン人のフィリピンを』とか『ビルマ人のビルマを』などとの声明が彼らに期待を与えたが、それに添い難い事態がある時、これに対する彼らの不満は深刻となるであろう。日本の歴史は日本人にこの種の事業に訓練の機会が少なかった。世界国民中その道のエキスパートはイギリス人である。

英国人は何事についても論理の一貫性、機構の統一性、体制の整備ということには無頓着であり、混沌状態に平然と安住し、また矛盾、不一致を巧みに妥協せしめる特殊の妙を得ていて、万事規格統一せねばならぬ日本人と大分異なっている。

英国の属領、植民地の統治制度や本国との関係は実に複雑で、英国が『つぎはぎの蒲団』といわれるのは当然である。英国は長年の間に手に入れた植民地や属領を統治するのに中央集権的または英国本位に統一せず、各民族をして自治的な統治を認めている。多種多様の異民族の統治に功を焦らず悠長にかまえ、自然と英国本位になびかせようとしているのであろう。

う。老獮であり、感心せざるを得ぬ。英国のこの民族性は植民国として、諸民族の指導国として大なる長所と思われる。英国が大帝国として繁栄を極め、文明史上大なる足跡を残したことは、この度の英国の敗北に関わらず、我々は学ぶべき点であろう。

わが国民はその血の純なるが故にややもすると異を容れる寛大さに乏しくはないか。英国民が極めて悠長で自然の推移を待つものに対し、我々はとかく功をあせり干渉したがることを考えるとき、東亜共栄圏の盟主たるべきわが国民は静かに反省して、英国から学ぶ謙虚さが必要であろう。盟主として支配する段階から一步向上して東亜諸民族を真に我等と同じ文化水準の上に立ち、同じ目標に手を携えて最高の理想状態に達するためには原住民族の敬服と同意が必要であることを思えば、英国民や蘭国民が各植民地に施している学術上、文化上の施設や活動に謙虚な気持ちで学ぶべきではないか」⁶¹⁾

しかし、軍国主義・全体主義の嵐は学園に容赦なく襲ってきた。

1942（昭和17）年7月には住谷悦治教授が軍の圧力で辞職を余儀なくされた。また、卒業式の繰り上げがさらに引き上げられ、9月に本来翌年3月に卒業するはずの第18回卒業式が6ヶ月短縮して挙行された。

1943（昭和18）年2月に田中校長の生みの親で、若き田中校長を支えてきた教頭であり庶務課長の西依六八教授が死去した。西依教授は1882（明治15）年佐賀県に生まれ、1909年7月京都帝大理工科純正化学科を卒業し、日本製布株式会社に勤務の後、立命館中学高等予科、満鉄中央試験所に勤務し、1923年4月松山高商創立の年に赴任し、商品学の権威であり、野球部長を長くつとめ、松山高商の名を全国に高からしめた教授であった。また教員出身の最初の法人理事でもあった。

61) 『松山高商新聞』第173号、昭和17年4月25日。

1943年度の入試が3月末に行なわれ、4月8日に入学式があり、215名が入学した。田中校長は入学式で「東亜の指導者」として気魄をもって励むよう激励した。

同年9月、秀夫は故西依六八の後任として法人理事に選任された⁶²⁾。秀夫は生徒課長として、理事として名実共に田中校長・専務理事を支えるナンバー2となった。

同年9月に本来翌年3月に卒業するはずの第19回卒業式が6ヶ月短縮して挙行された。この時、内田勝敏氏が卒業している。

また、同年11月には3恩人の胸像が供出させられた（いわゆる金属供出）。

軍国主義の嵐の中、12月に秀夫は論文「英国のパブリック・スクールに就て」を執筆し、『松山高商論集』第6号（西依、賀川両教授追悼記念号）に掲載している。その大要は次の如くであった。

「イギリスの教育制度は、父兄の社会的、財産的事情によって2つの流れをなしている。一方に無産労働者階級は普通の公立小学校から公立中学校に進み、各種の実務教育を受けて社会に出て、概して大学教育を受けない。他方に有産上流階級のものにはパブリック・スクールに進む。パブリック・スクールの特徴は、第1に皆私立で授業料は高い。第2に授業内容は著しく古典的である。そして、その訓育方法に特徴があり、皆寮制度である。一種のスパルタ教育訓練を受けストイズムの躰けを身につける。次に競技の強制訓練がある。これにより忠誠、犠牲、協同、公正、正々堂々の精神等の美德を体得する。ロイヤリティ、ストイズム、フェアプレイなどがパブリック・スクールの教育の骨子で、中世武士道の流れを汲んだ紳士魂である。このパブリック・スクール精神に養われた英国人が英国の支配階級の大部分をなし、社会のあらゆる分野、植民地で活動し、近世英国の

62) 『三十年史』231頁。なお、西依六八先生の顕彰碑が昭和52年5月28日に野球部OBによって、松山大学の構内、正門入ってすぐ左側の地に建てられている。

大発展の原動力であった。

しかし、今日パブリック・スクールに対する種々の非難がなされている。名校長を得ることが困難となっている、教科が古典偏重で実用を忘れて、スポーツを過度に重視し学問研究を疎かにしている、歴史伝統にとらわれ形式に流れている、貴族主義で授業料が高すぎる、等々。にもかかわらず、英国人は依然として自分の子弟をこの学校に入れんことを願ってやまない。貴族階級、上流階級だけでなく、中流階級はもとより無産階級の父兄までもがである。

パブリック・スクールへの批評は尤もであるが、本来英国人はスポーツを愛する国民である。競技のためには多少の弊害は問題にしない。又、古典的教養に傾きすぎるといえるが、多くの英国人は自分の子弟を学者にするよりも人格を陶冶し、紳士たらしめることを願っているのである。寮生活・監督制度の弊害についても多くの英国人は人物養成の手段として容認している。形式主義という批評も憂うるにたらない。英国人は保守的であるが、決して文明に遅れておらず、軍事力といい、設備、文化といいあらゆる方面で各国を凌いで新しいものを考案、製作している。オリジナルな学者も出ていて、心配することはないと思っている。要するにパブリック・スクールに欠陥はあるが、その欠陥を意に介しない程のおめでたい英国人なのである」⁶³⁾

1944（昭和19）年には文部省の文系縮小政策、商科敵視政策の中で、福知山高商の2～3年生を引き取る形で合併し、4月松山経済専門学校に名称替えを余儀なくされた。

1944年度の入試は3月末に行なわれ、定員200名に対し、志願者は2,311名に達した。この年の入試には英語はなかった。それは敵性外国語のゆえであっ

63) 伊藤秀夫「英国のパブリック・スクールに就て」『松山高商論集』第6号、西依、賀川両教授追悼記念号、昭和19年5月。

た。この年に入学した生徒の一人に神森智氏(後、松山商科大学学長)がいる。44年度から勤労働員が拡大し、通年動員となり、県内外に動員され、この年の授業は1年生は曲りなりにも9月まで行なわれたが、他は殆どなされなかった。

同年9月に6ヶ月短縮の第20回(経専)卒業式が行なわれた。この時の卒業生の一人に作道洋太郎氏(九州帝大に進み、後、大阪大学教授)や長沼直行氏(東京商大に進み、後、三井東圧株式会社副社長)がいる。

また、同年11月、授業中の発言が戦争非協力のゆえをもって古川洋三教授が退職を余儀なくされた。

1945(昭和20)年度の入試は1944年12月に行なわれ、定員200名に対し、志願者は何と4,156名に達し、文部省は定員オーバーを無条件に認め、本校は377名を入学させた。しかし、文部省の指示で入学式は7月に延期された。

さらに1945(昭和20)年からは文部省の指示により授業は中止され、生徒は勤労働員に、戦地へと駆り出された。

7月26日の松山大空襲により、鉄筋の本館、講堂・図書館、加藤会館等が焼け残ったが、木造校舎および教机・備品等が殆ど全焼した。この空襲で、秀夫一家も焼け出された。また、田中校長一家も焼け出された。そのため、焼け残った加藤会館の1階和室に秀夫一家が住み、2階和室に田中校長一家、また1階の洋室に吉田昇三(1942年12月松山高商に教授として赴任)一家が住んだ⁶⁴⁾。

8月6日広島に原爆が投下された。この日、加藤会館に住んでいた吉田昇三は「原爆の日の異様に赤い夜空を眺め」⁶⁵⁾たという。恐らく、秀夫も見たであろう。

その後、8月8日にはソ連が対日宣戦布告、9日満州に侵入した。また、9

64) 松山大空襲時の学園の被災については経専22期卒の亀田誠公「校舎の焼け跡に立ち校歌にむせぶ!」松山商科大学『田中忠夫先生』昭和61年、208~210頁。吉田昇三「田中忠夫先生を偲ぶ」同書、120~123頁。神森智氏よりの聞き取り。

65) 同、122頁。

日長崎に再び原爆が投下され、そして、ついに鈴木貫太郎内閣はポツダム宣言を受諾し、8月15日、敗戦を迎えた⁶⁶⁾

このような戦時体制の中、伊藤生徒課長兼理事がどのような活動をしていたのかは具体的には不明であるが、田中校長を補佐し、戦争遂行の勤労働員の手筈、引率等に従事し、また、空襲にあい、焼き出され、辛酸をなめたものと思う。

第2節 戦後期（1945年8月～1947年2月）

1) 1945年8月以降

戦後の学校の校務も、伊藤秀夫が生徒課長（1934年10月～47年2月）、大鳥居蕃教授が教務課長（1934年10月～49年4月）、増岡喜義教授が庶務課長（1943年3月～52年6月）を続け⁶⁷⁾ 田中忠夫校長を補佐した。また、伊藤秀夫は法人理事も続けた。

1945（昭和20）年8月22日午後1時より焼け残った本館階下の校長室にて、戦後初の教授会が開催された。田中忠夫、星野通、大鳥居蕃、高橋始、増岡喜義、戸川年雄、川崎三郎、古茂田虎生、吉田昇三、比嘉徳政の10人が出席した。伊藤秀夫はなぜか出席していない。この教授会で、当面の措置を決めた。

①校内復旧作業のために、松山付近の在住の1年生30名に25日出校を、2、3年生に27日出校を命じる。②2、3年生の養護班は8月まで休養のところ、松山付近の在住者は27日出校を命じる、③西条方面の勤労働員の作業解散帰休者は9月16日出校を命じ、東洋レーヨン松前工場製塩作業者は交渉成立次第出校を命ずる、等々を決めた⁶⁸⁾ 授業の再開の準備である。

8月31日の教授会で3年生の卒業を戦時教育令にもとづき9月に行なうこと、1年生の授業を10月1日から行なうこと、2年生は未定の旨などを決め

66) 戦時下の学園の状況については前掲の拙著『松山高商・経専の歴史と三人の校長』第4章第3節参照。

67) 『六十年史（資料編）』131～132頁。

68) 『三十年史』103頁。

た⁶⁹⁾

9月10日の教授会で、3年生の卒業資格の認定が行なわれ、349名全員を合格とした。

1年生は、東洋レーヨンとの交渉が成立し、9月16日より11月19日までの2カ月間、同工場の工具寮に起臥しつつ、隔日交代授業制の下に同工場の塩田作業に従事した。このような変則的授業になったのは、校舎が焼け、また、焼け残った本館にまだ借家人の松山通信局が居たためであった⁷⁰⁾

9月15日、教授会を開催し、学科目改正案を審議、可決した。改正の趣旨は①合理的、能率的事務処理能力の涵養。②経済関係の専門的知見の啓培。③島国的偏狭性を脱却せる国際水準に於ける教養の確立⁷¹⁾であった。これを見ると、敗戦の原因を考察し、合理的思考能力の欠如、経済学的知見の欠如、国際的教養の欠如等を反省し、学科目改正を協議しようとしたことが推測される。この方針のなかには秀夫の考え—リベラリズム、国際的教養重視—も入っているものと考えられる。

9月20日に第21回（経専）卒業式を挙行了た。6カ月短縮で、354名が卒業した⁷²⁾ なお、このときの式辞は残念ながら未発見である。この時に卒業した一人に稲生晴氏（後、松山商大学長）や鶴居律氏（後、温山会長）らがいる。稲生、鶴居氏らの学年は勉強したのは入学した1943年度の1年間ぐらいで、44年度以降はほとんど勤労働員に明け暮れた学年であった。なお、稲生氏はこの後、九州帝大法文学部経済学科に進学する。

戦後直後の新しい教員人事として、田中校長は9月に歴史学者の松本新八郎を採用した。松本は大正2年愛媛県生まれで東京帝大を卒業し、同大の史料編纂所に勤めていた。同氏はマルクス主義歴史学の立場からの日本の封建制の研

69) 同、104頁。

70) 同、104頁。

71) 同、109頁。

72) 『三十年史』113頁。ただし、『六十年史（資料編）』141頁では351名、『温山会名簿』では359名である。

究者であった。『学生新聞』編輯子は「(10月13日)新任経済史の松本教授の初授業あり。あのちいさな身体によくあれだけの事が詰まっているものだ。松山高校を経て東大国史学科を御卒業、史料編纂所に八ヶ年の研鑽を積まれた日本歴史学界屈指の新進史学者の一人。本校の至宝的存在」⁷³⁾と高く評価している(ただし、勤務は短く、1947年3月退職)。

10月10日から、2年生の授業が焼けなかった加藤会館ホールで開始した⁷⁴⁾。当時2年生であった神森智氏の授業の回顧談を紹介しよう。

「終戦とともに通年勤労働員は終結。しかし授業開始は10月下旬、それも本校では2年生の半分のみ。残り半分と1年生は松前の東洋レーヨンを借りて授業。3年生は9月卒業生の最後の組ですでにいない。本校での2年生半分の授業は、加藤会館2階の広間に寺子屋式で座りこんで、長さ1間(1.8メートル)幅40センチ位の3人用の机で講義を聞いた」⁷⁵⁾

10月11日、マッカーサーは日本政府に5大改革指令を出した。その中に学校教育の民主化が含まれていた。

10月25日、教授会を開催し、自由主義の本旨にもとづき講義を行なうことを決めた⁷⁶⁾

10月25日、本校は新教育理念実現のため、自由講座の開設し、九大文学部の重松俊章教授を招聘した。なお、重松俊章は愛媛県出身、東京帝大文科大学卒。1919(大正8)年松山高校教授、1927(昭和2)年九州帝大法文学部教授、東洋史学の講座担当。1944(昭和19)年定年退官。同年石手寺の住職であった。のち、1949年4月松山商科大学教授に就任した(8年間在職)。

12月9日、GHQより「民主主義教育」に関する通牒があり、先の9月15

73) 松山経済専門学校『学生新聞』創刊号、1946年5月1日。

74) 松山経済専門学校『学生新聞』創刊号、1946年5月1日。『三十年史』42頁。

75) 神森智『回顧 松大の戦後70年』松温会での講演。

76) 『三十年史』110頁。

日に決定した学科目改正案の再審議し、さらに検討することとした⁷⁷⁾

12月17日、衆議院選挙法が改正公布され、男女20歳以上に選挙権、25歳以上に被選挙権が与えられた。18日衆議院が解散され、1月に戦後初めての総選挙が予定された。

1946（昭和21）年1月4日、GHQは軍国主義者の公職追放指令を出した。この追放令の結果、1月の総選挙は延期され、2月25日、幣原内閣は、戦後初の衆議院選挙を4月10日に決定した。この戦後初の総選挙に対し、田中校長を代議士にすべく、教職員や卒業生が運動を始めた。

1月20日、松山経済専門学校のある教員が岡田温（元、衆議院議員、元、帝国農会幹事、元、石井村長）宅を訪れ、応援依頼をしている。岡田温日記に「経済専門学校××先生来宅、田中校長立候〔補〕ニ付禎子ニ応援ヲモトメラル」⁷⁸⁾とある。禎子は温の次女で、劇作家、小説家でつとに有名であった。

ところが、選挙運動が軌道に乗りかけた途端、田中校長がGHQの公職追放命令に抵触する問題がおこり、立候補をやめざるをえなくなったのである⁷⁹⁾

2月、田中校長は教員人事として、元、本校教授で1942年（昭和17）から敗戦まで京城高商の教授をしていた太田明二（後、松山商科大学長に就任）を採用した⁸⁰⁾

3月4日、戦争中本館・講堂に入っていた通信局が漸く移転した。

3月8日、応召されていた中国語の浜一衛教授が台湾から帰校した。他方、哲学の木場深定教授と中国語の三木正浩教授が退職した⁸¹⁾なお、木場教授は東北帝大に転任された。

77) 『三十年史』110頁。

78) 『岡田温日記』昭和21年1月20日付け。

79) 増岡喜義「田中先生と新田家の思い出」『田中忠夫先生』145、146頁、「座談会 田中忠夫先生を語る」『田中忠夫先生』239頁。田中先生擁立の中心メンバーは明らかでないが、おそらく教員では増岡喜義、卒業生では田村清寿（高商4回卒業）であろう。

80) 『三十年史』141頁。

81) 松山経済専門学校『学生新聞』第2号、1946年6月1日。

2) 1946（昭和21）年度

本年度の校務も伊藤秀夫が生徒課長，大鳥居蕃教授が教務課長，増岡喜義教授が庶務課長を続け，田中忠夫校長を補佐した。また，伊藤秀夫は法人理事も続けた。

1946（昭和21）年度の入学試験は，4月7日，本校では行なえず，松山商業学校（唯一戦災を免れた）を借りて挙行した。定員200名に対し，志願者は1,677名に達した。そして，4月14日に筆答試験の合格者649名が発表され，4月26日に口答試験・身体検査が行なわれ，5月3日，261名の合格発表を行なった⁸²⁾

本年度の英語の入試問題のうち和文英訳の問題は「戦争後本当ニヨイ日本ヲツクルタメニ日本人ハ皆自分ノ仕事ニ全力ヲツクスコトガ一番大切デス」という出題であった。英語を出題・採点した秀夫は，次のような採点批評を述べている。

「本年度の受験生は戦争の為満足な中等教育を受けて居らずその上英語圧迫の時代に中学生活の殆どを過ごしたのであるからその学力の低下は最初から考へに入れて問題も相当程度を下げて出題したのですが，やはり出来は芳しくなかった。中には『此れは』と云ふ程成績のいゝ人もあったが，一方『此れでは』と思われる人もあったのは例年と同じですが，総体的にみて成績は例年に比しずっと低下していました」⁸³⁾

そして，入学式は6月3日の予定であったが，文部省が「軍関係学校出身者生徒は在籍人員の1割以内とし，且つ追って指示あるまで入学式を無期延期せよ」との通達があり，入学式は延期された⁸⁴⁾

82) 『三十年史』107頁。

83) 松山経済専門学校『学生新聞』創刊第1号，1946年5月1日。

84) 『三十年史』107頁。松山経済専門学校『学生新聞』創刊第1号，1946年5月1日。同，第3号，1946年7月1日。同，第4号，1946年8月1日。

4月16日、田中校長は先に軍部の圧力により1944年11月から学校を退いていた古川洋三を教職に復帰させた⁸⁵⁾なお、古川は学校退職後、1945年2月辰馬海事記念財団に、10月からは伊予銀行囑託(通訳)となっていた。

4月29日の教授会で、学科目の改正を決めた(4月実施)。1946年度からの新しい学科目は次のようになった⁸⁶⁾

公民(倫理、文化史、哲学)、国語、化学、物理、数学、体操、英語、独・仏・華語、商業経済、経済地理、経済史、経済原論、経済政策、経済変動論、金融、財政、日本産業論、国際経済、統計、経営、簿記、会計、商業数学、珠算、事務用文、貿易実務、法学通論、民法、商法、経済法、原書講読。選択学科(保険、銀行、外国文学、親族相続法、社会政策、政治学、西洋史、会計監査、工業経営、外国経済、海運、農業政策)。

なお、『三十年史』の「教務」の執筆者・大鳥居教授は「出来上がった新学科課程は、結局目新しい内容は盛られなかった⁸⁷⁾と遠慮して述べているが、戦前の道義、教練、体練、経済統制論、東亜経済論は削除され、経済変動論、国際経済論などが新設されている。

5月1日には、松山経済専門学校『学生新聞』が創刊された。その前身の『松山高商新聞』は1943(昭和18)年4月30日の第189号で廃刊を余儀なくされていたが、あらたに創刊された。編輯兼発行人は3年生の住谷馨(住谷悦治の次男)であった。創刊号では「自由を我等に」と題し、戦時中学生の自由や科学的真理の探究が抑圧されたことが、侵略戦争を聖戦として、学生の純真さを悪用し侵略戦争に駆り立て、好戦的日本人を作ったと深く反省し、一日も早く、学校を真理探究の殿堂として再建し、学校の民主化をはかり、今こそ目覚めて正義のために新生日本のために活動しようではないか、真実を追求し、人格の完成を目指し努力しようではないかという、大変格調高い論説を発表し

85) 『学生新聞』第2号、1946年6月1日。

86) 『三十年史』108~109頁。

87) 同、108頁。

た。著者は3年生の吉田二郎（後、阪本二郎。後、一橋大学教授）で、それは次の如くであった。

「自由の鐘は今高らかに学園の黎明を告げている。理想の炬火をかゝげ、理知の進軍を続けつゝある学生の前途を祝するが如く又励ますが如く力強く希望に満ちて鳴り渡っている。憧れの此の鐘の音を聞きつゝ学生は戦時中の悪夢より目覚め、明るい太陽の光を仰ぎみてがっちりスクラムをくんで、遠き真理の輝きを探しもとめて、若いそして力に充ちた新生の第一歩を踏み出そうとしている。

吾々は此の自由の鐘を響かす為に如何に多くの犠牲を払ったことだらう。父母を兄弟を、そして先輩を、遂には生活の根柢たる住居迄も又更には学生の生命とも云ふべき書籍をも軍部内の勢力争ひの侵略戦争の犠牲として失って了ったのだ。今その極めてその高価な犠牲の代償として漸く学生の自由そして又学園の自治は与へられたのである。我々の血と汗と苦痛とそして努力の結晶としてのみ自由なる学園の新生は大いなる意義を持つものである。この自由を正しき方向に発展せしむる権利と義務は吾ら全学生の手中に委ねられたのである。

自由なき学園は魂なき人間の養成、軍部の野望満足の機関としての外何等意義をもたず、学園本来の使命を失へるも甚だしい。戦時中学生の自由なる意志は極度に制限され、軍閥官僚の不正なる侵略搾取に反対するが如き、一切の科学的真理は極度に排斥され、自己の都合よき誤れる史実の暗記を強制して学生を偏狭なる思想不具者と為し、八紘一字、大東亜共栄圏確立等一聯の不合理的説明、不可能の理論を以て、侵略戦争を聖戦と呼びしめ、学生の魂を萎縮せしめて骨抜き人形としてその純真を悪用し侵略戦争の矢面に立たしめたのである。

個人意志の自由、学問研究の刺激と、そしてより正しき真理探究への烈しき欲望なき所に科学の進歩あるべき筈は無く、科学を軽侮し精神万能を

信じ続けたその結果は、今回の如き徹底的敗戦を招いたのである。日本の今迄の教育は総て好戦的日本人の養成といふ世界の人々から客観的に見て明らかに誤った方向に向っていたのであり、その総てが今次大戦の原因ともなったことを反省して見なければならぬ。

敗戦は日本の誤った教育の為にはといふより我等学生の為には大きな幸福であったかも知れない。古い総ての制度を打破することは容易ではない。然し此の荆の道を越え行けば遙か彼方には希望の光明が、真理の輝きが我らをさし招いているのではないか。旧制度の打破、此れは若い人々、特に純粹なる理性的批判を下し得る自由な立場にある学生の手により、その若き熱と力を以て勇敢に行なはねばならないのである。

先づ第一に一日も早く学生の為の学校を作る事である。学生の自治による自主的な真理探究の殿堂として再建しなければならない。学校を民主化せしめる者、それは誰か？ 聯合軍司令官でもなく、現内閣でもなく、又封建的組織の中に眠る教授連では更にないとすれば、それは云ふ迄もなく、我ら学生の務めである。学生全体の自由意志に基く総意こそが学校を改善するのでなければならないのである。

学生は今こそ永き夢から覚めて自分自身を取戻し脚を大地にふみつけて先づ自己といふものを発見しなければならない。何時迄も命ぜられた事を何の批判も無く、黙々と馬車馬の如く行ふといふのでは社会の進歩はあり得ない。正義に向かって積極的な勢力を傾けるといふ学生こそ、新生日本に存在する価値があるのであり、徒らに伝統を唯一無二のものと思ひ、その殻の中に逃避し、時代の進歩に順応、否時代の進歩を先導して行けない様な消極的學生は社会の正しき発展を妨害する以外の何物でもない。

もう二度とだまされてはならない。自分自身の外に誰を頼る事が出来よう。今迄の誤った歴史の觀念を一掃し、古い伝統の束縛から脱出して真に正しきもの、本当に真実なもののみを心の友として、楽しき学園生活の中で個人人格の完成を目指して一層の努力を続けようではないか。理性的批

判力を持ち、正義を愛し、実行力の或る学生のみが社会進歩の推進力である事を堅く銘記しなければならないのである」⁸⁸⁾

また、創刊号には、秀夫の友人で文部大臣の安倍能成が「新生日本の方途」という論文を寄稿し、元、松山高商教授で同志社大学客員教授の住谷悦治が「松山経専学生新聞に寄す」と祝辞を寄せている。

5月7日には、教職追放の大綱に関する勅令（教職員の除去、就職禁止及び復職の件）が公布され、教職員の適格審査のため、本校では6月11日に2名の委員候補者（星野、伊藤教授）を選出し、四国地方高専学校集団長（高松経専校長）に通達した。以降適格審査が始まった。本校では、田中校長と浜田喜代五郎教授が対象となった。田中校長は翼賛壮年団の県役員であったこと、浜田氏は憲法学の論文が問題とされた⁸⁹⁾

6月1日に、『学生新聞』第2号が刊行された。立命館大学学長の末川博が「民主主義学園と生活」と題する論文を寄稿した。また、編輯子による「唯物史観」の解説文が掲載されており、戦後民主主義、社会主義の雰囲気学園にうかがわれる。当時3年生であった神森智先生の話によると「マルキシズム関係の書物は、戦時中は、『貸出禁止』の赤いラベルが貼ってあり、全く見ることはできませんでした。ですから、戦後は非常に新鮮で、同級生たちは皆、むさぼるように読んだものです」と述べられている（神森先生からの聞き取り）。

9月1日、延期されていた新入生の入学式がやっと挙行され、1年生246名が入学した。田中校長の入学式における式辞は次の如くで、敗戦後の生活困難、動乱の時代への覚悟、民族の将来への希望、平和で幸福に生きる道を失わないこと、西欧文明の受け入れと我が国の固有文物の廃棄に臆病であってはならぬが、だからと云って文明の輸入と固有文物の廃棄に軽率であってはならず、その取捨選択に正しい態度をとるべく総合的叡知を持つように新入生を激励した。

88) 松山経済専門学校『学生新聞』創刊号、1946年5月1日。

89) 『三十年史』112頁、『田中忠夫先生』62頁。

「向学心に燃える本校第二十四回目の新入生諸君を迎へて、まことによるこびにたえない。戦時中は学徒動員によって向学心を抑へられ、今年に入つても入学が五ヶ月も延期せられたことについては、定めて遺憾にたえなかつたことと思ふが、それだけ今日の入学に対する諸君の喜びの大きいことに祝意を表する次第である。

しかし、諸君を待っている学生生活の苦しい現実についてはこれ又深く同情せずにはおれないのである。食糧事情の逼迫、宿舎事情の困難、学校々舎、教育施設の不備、更に又社会事象の急変があり、思想界の革命がある。これら数々の不備と不足と不安定とは国民全体の深い悩みであるが、とくにすべてに感受性の鋭い諸君にとっては他の年齢層に幾倍する苦痛であるに相違ない。

社会と思想の変革の容易ならぬことについては誰しも一通りの覚悟をもっていたと云はれやうが、食糧や生活必需品の窮乏については、恐らく国民の大部分が予想もしなかつたところであつたと思ふ。七百五十万人の軍動員、千三百万人の軍需産業動員、併はせて二千万人を超える労働力、質の特に優秀な国民労働力の半分が平和産業に復員するのである。この事情は産業の設備と資材についても同様であつて、労力と資材の優秀なる半分以上のものが民需に転換するについては、国民生活が急速に豊かになるであろうと想像することは少しも無理からぬ希望であつた。この期待が裏切られて、終戦以来一年を経た現在に至つて、戦時中以上の生活苦にあへがなくてはならぬとは何としたことであらう。正常の経済活動への復歸にさへなほ数年、少なくとも今後三、四年を要するといふに至つては唯々驚くの外はない。三、四年と云へば諸君の本校における学生生活の全部である。その全生活が国民生活の非常時下に過ごされるであらうといふことは、まことに同情にたえないのである。

しかし、これを社会事象の安定と思想混乱期の終熄の困難とくらべれば、とうてい同日の談ではない。一応の安定は或は十年とか二十年といふ

近い将来に期待できるかも知れないが、世界の進運にマッチし、これにプラスすることのできるやうな解決は、とても一世代位の簡単な努力で片づく問題ではあるまい。少くも諸君の一生はこの動乱期にただようものと覚悟しなければなるまい。

それではこのやうな時代にあつてどのやうな心構が要請せられるであらうか。

思ふにその一つは民族の将来に対する希望を失なはないといふことであらう。哲人スプランガーも言つてをるやうに、悲劇に対処する態度の如何が民族の眞の偉大さを決定できることゝ信ずる。武器は捨てた。帝国主義的野心も完全に抛棄した。しかし世界的レベルにおける文化国家として、平和に平福に生きる道はふさがれてはいまい。若しわれわれにしてつとめて怠たらないならば、更に進んで世界の文化に高い程度に貢献することも不可能ではあるまい。軍事的政治的には無力であつたギリシャが、ローマ的世界における文化の先達であつたことを想起しようではないか。

その第二は総合的叡知であると思ふ。その意味は、馬車馬のやうに或る一事にのみ盲目的に熱中するのではなくて、広く見、深く考へて片寄らない正しい判断力をもつといふことである。一体戦争に敗れるといふこと程、その国の文物制度に深酷〔刻〕な反省を与へ、外来文化の輸入に徹底的態度をとらせることはない。しかるに我々は絶海の孤島に隔絶して生きてきた上に他民族との戦争の経験に乏しく、これに敗れた経験を全然もたない。したがつて外来文化の影響を心の髓迄泌み込んで受取り、自国の文化を徹底的に清算する機会をもたなかつたのである。中古以来の中華の文物の摂取にしても必ずしも徹底的とは行かなかつたし、とくに明治以来の西欧文明の輸入は極めて皮相なものに過ぎなかつた。いはば今度の戦敗は、わが国民が心を空うして西欧文明を徹底的に輸入し、これを通じてわが国の文物制度を全般にわたつて反省するはじめての歴史的機縁であるといはなければならぬ。

このやうに広く深い問題の解決にあたるについては、特別の心構がなければならぬ。外来文物の輸入と、固有文物の廃棄に臆病であってはならぬ。それかと云って輸入と廃棄に軽率であってはならぬ。その取捨選択に正しい態度をとり得るためにこそ総合的叡知が要請せられるのである。

悲劇の間に処して希望を失はず、文物の取捨選択に総合的叡知をはたらかすといふことは生やさしいことではない。これは国民全部に課せられた歴史的使命であるが、とくべつの程度において知識人に課せられた特殊の使命であると云はなければならぬ。親愛なる新入生諸君が、七百のベテランとともによく学びよく思つて、この歴史的使命を果すに足る十分の教養を身につけんことを念ふ次第である」⁹⁰⁾

また、生徒課長の秀夫も新入生歓迎の辞を『学生新聞』第5号に寄せた。それは次の如くであった。

「六月に入って入学すべきものが九月迄待たされて、やっと入学させられる諸君は特に嬉しい事だらうと十分にお察しする。諸君は本校で将来実業経済界の有能なる実際の実務家たり、且自分直接担当の仕事以外に広く経済界の諸問題に就て誤らざる意見を建て得る識見を有する素養を得ねばならぬことは勿論だが、此の外に諸兄は広く社会人として、国民として、大きく云へば人として立派で、尊敬に値する人格たる修養をせねばならぬ。此点が高等専門学校教育の重大なる仕事の一つである。

諸君は其為には所定学課の勉強を少しも怠る事なしに様々な読書を必要とするのみならず、諸先生や学友との接触から種々の有益な影響を受けねばならぬ。即在学中にあらゆる方法によって人格の基礎を築き真に尊敬を得るにふさわしき重厚にして礼節ある、しかも志操大堅固で威武にも利欲

90) 『学生新聞』第5号、1946年9月1日。

にも屈せざる人物たる素養を身に得ねばならぬ。これは普通に所謂文化的教養以上のもので、非常な努力を要するが、差当たり私は様々の名古典的読みものの研究と偉大なる人格者の伝記などに親しむことをおすすめする。映画や音楽に親しみ、絵画や文学を談ずる丈で文化的教養だと早のみ込みしてはならぬ。論語に親しみ、フランクリン伝を語る友を持つことも頗る大切である。

今一つにこれに劣らず大切なことはスポーツに精を出し所謂フェアプレイの精神や犠牲心などを骨に徹するまで体得することである。ウェリントンが自分の勝利、やがて英国の勝利はイートン校の運動場できたへ上げた精神のおかげだと云ったのは誇張ではない。

かくて出来上った人格のみが本当の自由を享受し所謂民主主義日本を担って行く任に堪へると思ふ。(八、十六)⁹¹⁾

9月に入ってから田中校長は教授会に辞意を表明し、後任校長の選出を依頼されたようである。それに対し、9月21日増岡先生が温山会を代表して上京し、適格留任を求めて陳情運動を行なった⁹²⁾

10月29日の教授会において、田中校長は、自らの適格審査の結果不適格と判定されたことを報告した。不適格の理由は、戦時中翼賛壮年団の役員（愛媛県支部の副支部長）になっていたことであった。この校長報告に対し、伊藤秀夫教授が教職員一同を代表して再審査の申請手続きをとりたいたとして、再審査の請求、人格証明等の努力を行なったが、無駄であった⁹³⁾

11月3日、新生日本の象徴たる新憲法・日本国憲法が公布された。全国で祝賀行事が行なわれた。本校では午前8時より、田中校長始め各教授、生徒一同が会し、式典を挙行した。田中校長が式辞を述べたが、新憲法発布を祝する

91) 松山経済専門学校『学生新聞』第5号、1946年9月。

92) 『田中忠夫先生』62頁。

93) 『三十年史』113頁、『田中忠夫先生』62頁。

と共に新憲法発布に当たり国民意識の盛り上がり不足していることを率直に指摘している点が注目される⁹⁴⁾

11月19日の教授会を最後にして田中先生は謹慎した⁹⁵⁾

なお、11月、体育の比嘉徳政教授が一身上の都合から退職し、郷里沖繩に戻られた⁹⁶⁾

他方、田中校長は最後の人事として、11月に三好俊夫（神戸商業大学卒。経営学）を教授として⁹⁷⁾12月に越智俊夫（東京帝大法学部政治学科卒。商法。後、松山商科大学長に就任）を教授として採用した⁹⁸⁾

12月、財団法人の人事として、理事会は星野通教授を教員出身の理事に選任した⁹⁹⁾

1947（昭和22）年1月1日、伊藤秀夫は『学生新聞』に年頭所感を寄せた。田中校長が謹慎中の身であり、その代理として依頼を受けたものと考えられる。その大要は次の如くで、国民生活、学園生活が戦争の惨禍にまざまざと直面する中、自由で民主的な文化国家建設の任務を学生たちに望むものであった。

「年は明けここに第三年目に入った。今迄は戦争の災禍から脱却し得たと云ふ一種安堵に似た心持が戦後の不安や生活苦をいくらかまぎらして居たが、今やその時機は去って戦争の災禍をまざまざと直視せしめられる年に入った。これと共に何とかしてこの惨禍を早く逸脱して直に平和なる文化国家として立ち行く正道を歩む様になりたいと云ふ希望を抱くと共に其道は口や筆の上で呼号するだけではなく、我々の日常の行動の上に具現せ

94) 『学生新聞』第7・8号、1946年12月1日。

95) 『田中忠夫先生』62頁。

96) 『学生新聞』第7・8号、1946年12月1日。

97) 『三十年史』の「補遺 松山高等商業（経済専門）学校、松山商科大学現（旧）教職員名」。

98) 越智俊夫教授追悼号の略歴から。

99) 『三十年史』231頁。

られねば駄目だと云ふことを心から自覚する必要がある年に入った。今迄の民主的とか自由とか云ふ言葉に只魅了せられた状態を脱して本当に民主的な自由を楽しむ様な生活は極めて地味で、寧ろ一見しては面白からぬ不愉快な生活を忍び、また深き考慮の能力なき人にとりては非民主的な不自由なと思われるであらう様なまはり道をすら通らねばならぬことをしみじみと覚るべき時に達した。此意味で今年は花やかな掛声のない、只黙々と地味な道をたどるべき苦しい年であることを期せねばなるまい。

況んや前述の如く戦禍のあと味のにがにがしさをまざまざと味はねばならぬに於ておや。

学園の生活もこれは同じ筈である。これに堪へ凌いだ後に始めて我々の希求する真に自由なる民主的文化的な学校に到達し得られる。そして其達成に精進した様な教養ある品位ある青年の指導によりてのみ真の自由なる民主的文化的な国家は達成せられ得るであらう。私は我学園八百有余の生徒諸君が此の重くはあるが而も光荣ある任務を完うする青年であることを期待して居る。求めるまゝに一言年頭所感を記す¹⁰⁰⁾

1947（昭和22）年初め頃から学制改革（6・3・3・4制）の方針が明らかになるにあたり、学生たちの間に本校の将来を憂える機運が生じ、1月23日、学生大会が開催された。2年生の榎本を議長にして、3年生の吉田二郎（後の阪本二郎）が大学昇格運動について、「私学として全国経専に頭角をあらわす本校も戦災により本館、加藤会館を除く木造館は全焼、併せて深刻なる現インフレ下に造築も困難となる。しかるに四国四県下の高専いずれも猛烈なる大学昇格運動を開始す。今にして本校の将来まことに憂慮すべき事態に立ち至る。よろしく全学生の熱烈なる与論の反映により学校当局へ運動を陳情せんとす」と提案理由を述べ、実行委員を選出した¹⁰¹⁾

100) 『学生新聞』第9号、1947年1月1日。

101) 『五十年史』231、232頁。

また、教授会側でも学制改革問題に取りくんだ。2月1日には増岡喜義庶務課長より、教授会に次の様な上京報告があった。

「学制改革問題は目下中央にて審議中につき確実なことは判明せぬが、…大学は講座制とし一講座に教授、助教授、助手を置くこと。各教授に研究室を設け、図書館を充実すること。要するに新制大学の設置は現在の大学（旧制大学）に準ずる施設を要する。現在の専門学校は、先ず新制高校として発足し、内容を充実した後、大学に昇格する方が順当なるべしとの説もある。文部省からの復興補助金は見込みはないが、低利資金貸し付けは見込みがある、云々」¹⁰²⁾

この報告を受け、校内に「学制改革（研究）委員会」を設けることにした。学制改革問題が熱を起し始めている中、1947（昭和22）年2月20日、田中校長は公職追放により、正式に辞職した。また、浜田喜代五郎教授も辞職した。そこで、第4代の校長を選出することになり、2月20日、伊藤秀夫教授を4代目の経専校長及び専務理事に選んだ。

伊藤秀夫を校長に選んだ理由について、『三十年史』は次のように述べている。

「田中氏の校長辞任の善後策として、教授会では後任候補者は『学内よりこれを求めること』とし、教授会と事務員会とは適宜連絡しつつ、それぞれ別個に意見を具申することになったが、衆目の見るところ、学内の最年長教授であり、また、故西依教授の後を受けて当時すでに財団理事の一員でもあった伊藤秀夫氏が、両会の圧倒的支持により校長候補に推薦され、2月20日付を以て第四代校長に就任した」¹⁰³⁾

102) 『三十年史』117頁。

103) 『三十年史』112頁。

このように、戦後の校長選びにおいては、教授会のみならず、事務職員の意見も聞いていたことが分かり、戦後民主主義の現れであった。

以後、学制改革・大学昇格問題は伊藤秀夫校長・専務理事の下で行なわれることになった。